伊勢參宮名所圖會

三

伊勢參宮名所圖會巻之三

目録

△桑名驛　△同三崎大明神　△中臣神社　△神野山淨土寺
△江場有王丸塚　△佐野神社　△尾野神社　△瀧室山妙見寺
△式部清水　△太夫村代神乐　△七里渡　△桑名海口
△天武天皇行宮　△矢田河原日蔵流三人骸　△町屋川　△縄生　△食野　△小向
△井尻神社　△星川　△安濃寺　△星川神社織姫　△鈴鹿山　△朝明川　△西富田三光寺　藤田相模守墓
△立坂神社　△富田やき蛤　△鳥出る鳴海神　△日永　△諏訪神社
△三重川　△濱田　△日永　△田屋川　△長田川　△吉村　△四日市山觀音寺
△退夕　△高岡川　△天澤山龍光寺　△浜谷川　△独鈷川　△加佐川　△神戸　△食野林光寺
△矢橋　張倉掃部助墓　△長吉　△澤塩濱　△若松　△三日市　△玉垣　弥郎加伎神
△白子　白子の濱　△白子觀音　△栗生神社　△清敬寺　△栗生神社　△上野村　大久保村　弥尼布里社

東国より来る宮の人街道より別れて津の江戸橋へ出る其所に浩桑名を始めくて宮へ出る

△本郡。神田。穂長
就智。横地

△衣手山

△酒井神社

△根上り松

△江戸橋。筆石

塔世橋 塔世川 塔世村

惠日山觀音寺 本尊聖観音の神体

國府阿弥陀

津 安濃津

愛宕權現

大乘山上宮寺 阿弥陀本社

安濃松原 安濃津西 安濃江系

阿漕浦

岩田村 岩田橋

岩田山園明寺

八幡宮 結城氏の古城

阿漕塚

△渋見 郡名庫 阪城紀

陶魔堂

△神宮寺

△志布見神社

△矢野

△小加良須御茶社

△里合社

△志浦 △雲津浦

垂水 日成紀寺 垂水若

藤潟 片樋宮

雲津川

小野古江渡

須川。肥留 月本 月見山

中道。小津

上野 小黒 俗貫

六彩菜原。涙川

△阿坂 正法山 浄眼寺

曽原 古城跡

△阿坂神社 阿坂社紀 野

△筏方片樋宮舊址 △東明山景德寺

△白米城跡

忘井

久米。塚本。松江

利瓏山藥師寺

巳五百森

松坂驛

愛宕山龍泉寺

光明山遍照寺

少名毘名神

三ノ目

梅松山菅相寺

△光福山朝田寺

△長田神

△意悲神社

△七見 日神社

神服郡 機殿

神麻續 機殿

△下樋小川 下樋小川橋

櫛田川

△魚見社

△保津 天香山神社

多気川 一名稲本川 又祓川

再拜橋

齋宮舊蹟 日溫湯。日卜定。日斎紀 日忌詞。日保系

齋宮村

同繪馬。大佛

△北畠屋敷跡

△勝田

△藤原

△根倉 日神社 佐久美江

△和屋 翁塚

△御笠山

△有尓 有尓神社 并有尓古墓

△大淀 大淀松 大よ掘 神社

△村松岸

△濱

△宇田 大刀自神社

△湯田野 日神社 ムヲ引石

△上野

△明星 安養寺

明野原

小窪橋

小俣 日神社 無量寺

松田橋

典合橋

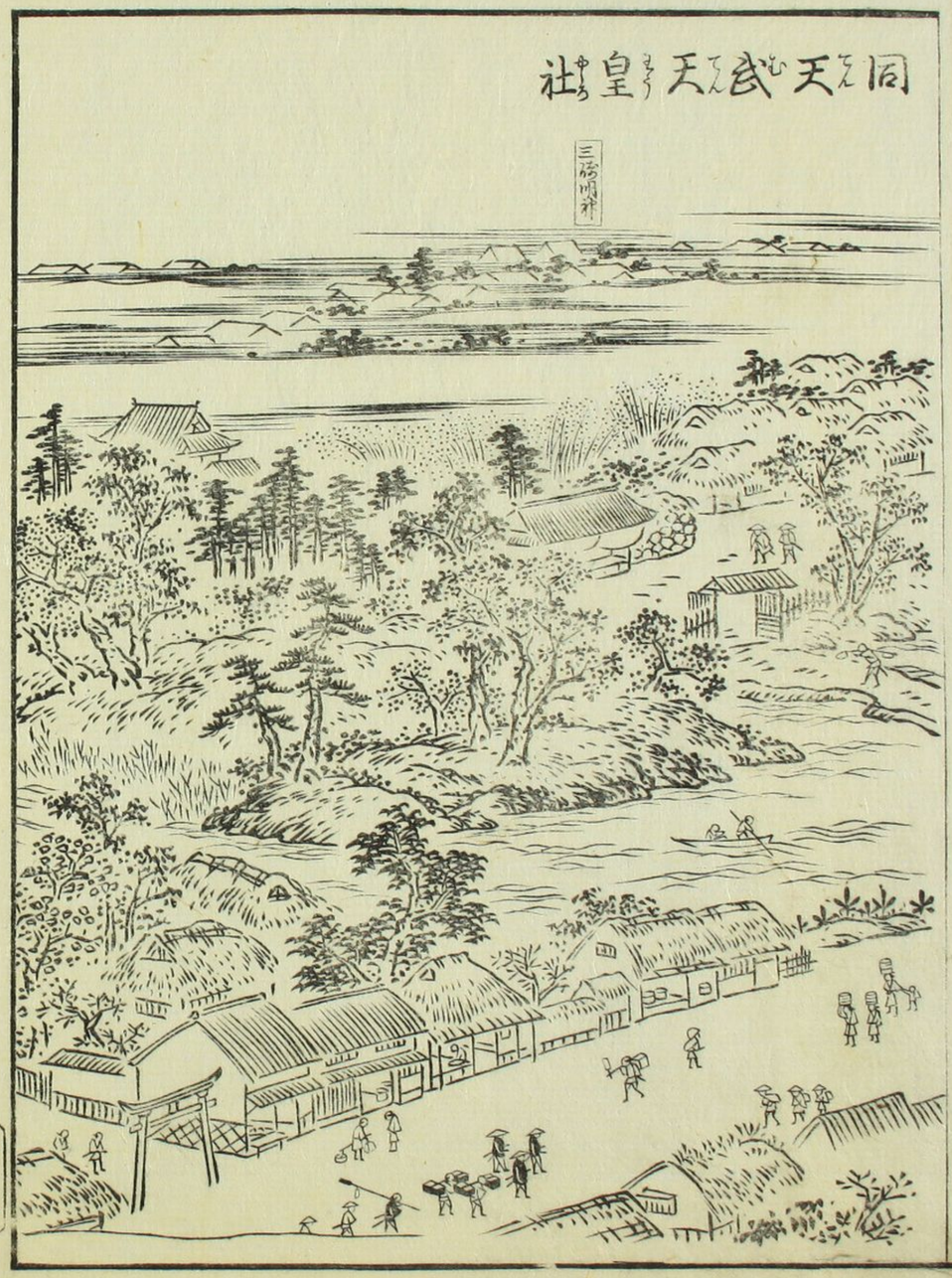
離宮院 中宿 神社

△未曽瀬

桑名渡口

同天武天皇社

三篠川神



羅山文集

曾聞二帝此停車
憾在吾邦未見書
今問先蹤人不識
誰賡風土補方輿

冨田
燒鹽
鹽肴
やう物
嘴や
鄙ゑ
其角

名物ちぐれ鹽

東國より來宮の人海道より別まて津の江戸橋へ出る
其脇路桑名を始めとして くさ〳〵出を

▲桑名驛　城あり文祿年中一柳右京太夫築く石垣人家一ゑ余
軒富商多く繁昌の湊なり云傳ふ〳〵又四ひい勢多長濱とも一
名にて菅侯氏領地なり　此町の北三里にして本曾川のゐぐまとの上勢多濱の境ゑ
其末社ゑ一目連社とてまつ〳〵まをり天目一箇命と神號ありて年ゑ一度祭祀として
異風拔末多ゑとあり其地甚清潔の地ゑて弟ゑ神宮の淵くまつまをせ〳〵不なり山辺富津村ゑ
枝葉多〳〵其南地代宮〳〵ひて先ゑ又大神宮の淵老濱へつ〳〵妙双の景地ゑ
ゑ云る日本武尊の旧名にて富津い菅の尾津なり記ゑも遠津と書〳〵ゆ人
今ゑ云て津と濱まつ武尊の旧名にて富津村ゑ濱谷郡村麻ゑるゑ〳〵人ゑ
て桑名へ陸つきなりゑ紀伊ゑ三まつ〳〵を〳〵尾張國ほ〳〵まへゑ
いきのんじゑ

▲桑名神社　武内之祭和大揖命云云　俗ゑ三嵜明神とゑ是なり
桑名市中より後ゑ東ゑの方ゑあり○社傳曰く景行天皇の御宇孫應天武天皇
大友の皇子をさけて皇后りゑも右地ゑ皇后をとぐ給ふ此地ゑ皇后
神を祭らせ給ひ此地ゑ皇后をとぐ給ふ入宮軍をもつて給ふ佛
和現ゑ神ゑ星〳〵日我ゑ祭給ふ此地の地ゑ
十一面観音菩薩ゑ三種の神宝ゑ流
此ゑ尾張熱田へ流海〳〵石破関の合戦ゑ打勝大友皇ゑを亡し天位を継給ふ云云
○縁起の文詳なり〳〵ゑ

▲中臣神社　桑名の武内春日大明神とゑ　世俗ゑい佐見院応應年中八月十八日
神號和現ありて麻ゑ多ゑ移り給ふ云云
麻〳〵まより牡麻ゑのりて海ゑ出や此桑ゑ出給ふとぐむる

毎年七月十七日祭礼俗ゑ日ゑ八月十八日祭礼
ありて第十七日を試楽とゑ公より社領寄附領ゑも尊敬ゑ
て當所第一の神社なり中臣の神社ゑ明神と稱ゑるべ
う浄土宗本尊阿弥陀如来○江場有王丸塚史乗洋○袖野山浄土寺桑名の市の中
魚屋川ゑあり祭神雅武義命○尾野山尾野神社素盞烏尊新宮神
堅ゑ〳〵尾神ゑ忠秋房と云悪僧此神社の別當なり〳〵ゑ地ゑ繁きを郷と押ゑ
を織田右府信長公永祿十一年攻ゑて焼せる

▲瀧室山妙見寺　桑名の駅北丁計東方村〳〵あり　茶の城豆桑名ゑ將新願所にて仏供寺
なり○式部清水此ゑの西の禁ゑあり〳〵和泉式部ゑゑ来りて住ゑ更
○去戈村桑名のを村なり〳〵ゑ〳〵人詩人来〳〵歌ゑ
六組ゑ上十二組出る法國寺亀孩をゑを右ゑ〳〵ゑ村〳〵ゑ

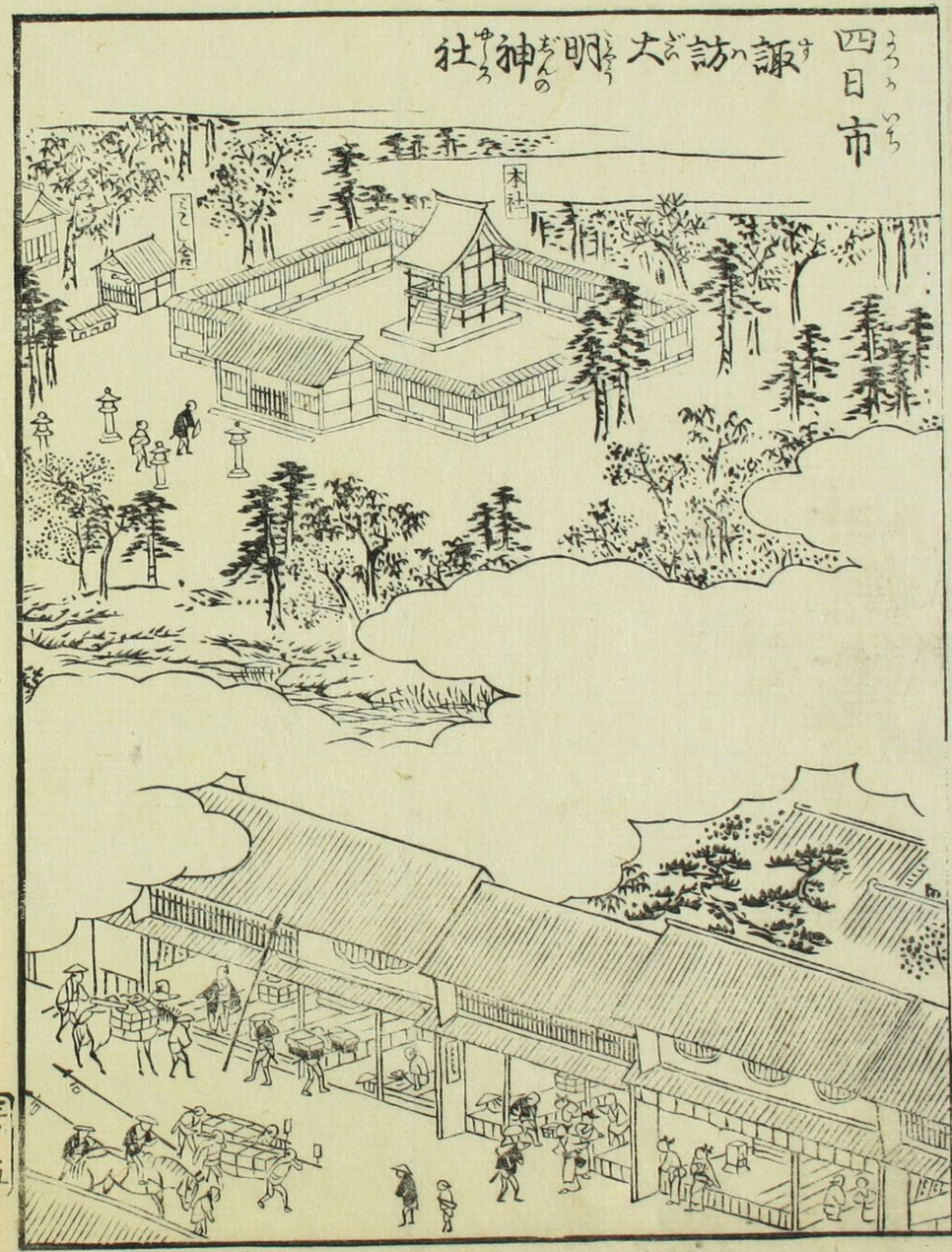
▲七里渡　四名い間遠の渡ゑ〳〵天武天皇尾州熱田遷幸の時此渡海長
きゑ〳〵て間遠と名あり桑名を結葉ゑ〳〵ゑ

みゑの月ゑるをのつゑ〳〵て里に急ゑぬ夜まの舟人　不知渡人

此渡里い伊勢尾張の境ゑ木曾川の落合此ゑ入る風あ〳〵き渡い尾張佐谷へ〳〵ゑ〳〵紀行三
里渡〳〵ゑ又佐谷ゑ〳〵の陸地い神ゑる鳥森を右〳〵熱田へ出ゑ又佐谷ゑ上半里ゑ海ア郡津

四日市

諏訪大明神社



日永追分

長明渡海記

行佗ぬ
いさ涙
むしに
立
ちくん
名明
ゐれば
日永
なるを
ぐり

代神楽い素名の
近村なる村ゐ出る
芝生を代ゐぐ〜と云い
庚甲の代結ふい代垢
離ゑどの日物なるべし
放ゆをぬとる其方
をまるべ

隠岐国牛頭天王まつりまを
陸奥伊勢相治　京よりみまいて東の方より行るる小伊勢や尾張の海面を行く浪のいと白くうつりをして
いとしくもあるかな　きよき浦としくも神の浪の那　業平

▲桑名御船場　海上より船の目当高燈籠常夜燈番所の服あり

▲天武天皇頓宮　桑名の所より北所斗西南矢田村より俗八幡の社とゝ○羅山紀行曰昔法皇
皇后の此地よりゝ不破関に帰幸み給ふ我ひ歌ひ給ひて即位給ふ天武帝是之皇后の天智天皇の御女後村統天皇
天武天皇より龍幸ありて此所行宮ゝ　崇神紀

▲矢田河原　縄生より　今は矢田町とゝ　天正十二年十月豊臣秀吉織田信雄と和睦ゝ不なり

▲城山　矢田一郎左衛門尉篭之永禄十一年織田右府信長公これを誅
代を○三人孤　峰とゝもとゝ人口にあり

▲剛屋川　橋の長サ百六十五尺不なり西面をにのム
又名る此西近に伊勢の境なり

▲縄生　小向のつきあるより里　昔を今総の驛とゝ○金井　瀬村とゝ　即金総○伊
勢遥拝所とゝ○ら非戸の跡なりとゝ

▲小向　松寺のつきあ○井尻の非社今非明とゝ　祭神素盞烏尊武内之尤
古城の跡あり是を林の城とゝ　沼本三河入る宗喜　猶篭ゝを弘治三年宮氏佐木
小倉三河守大将ゝてこれと攻る

所名
○星川　松寺の　細き流をゝ○安濃寺　本尊観音

天津星川激流の彩のうたる所ハ安のつゝとゝあるりの武
去那川やとの流をゝもて天の川のゝなりうさまぼ安濃寺を此方の言より名けゝ

▲星川　松寺の　○星川神社　所祭織姫の神武内なり

名寄
▲朝明山　桑名と巳日市の間尤ゝあるとゝ○　船明川　海道ゝあり　長明

名寄
ゝの神なる朝寺のゝ山ゝ是風ゝ霊をまけて義を敬る　定家

▲西富田三光寺　蒔田相摸守墓ゝ　文治三年一院御領にて蒔田
ゝ其所の守護人なりとゝ○三坂神社武内祭神若宮賀貴命
なり此社の境内より流る川を米苗川とゝ

▲富田　巳日市ゝ　名産焼蛤　○名出神社富田村の内右の方の森ゝ　武内之不祭鳥
鳴海神とゝ仕社傳とゝ遠あり

▲巳日市　浜田のつき　宿駅なりゝ家五六百軒海陸便よく勢州の通之
毎月六日市あり巳日より神ゝ名ゝ此湊二所往遠濃なり

渡海御免にて案名と同じ〻〻

○諏訪社　祭不建御名方命八坂刀賣命之（日市町の後ろ）其地と江義田と云此社丸赤堀家の重宝田原義右秀乃の胃あり

○三重川（日市の町内石橋あり）水芭はみ程家居城の地にて三里ばかり川上なり　伊保磨

吾妻三重北川原のへそろうかいもとゆく蛙うも

▲濱田　四い濱村なり（日市より一里あり）

紀伊ぬいさを感むいに芝寄んあさけるまいは日永なりなり　長明

▲日永　泊村のつき（遍路より宿里往還に日市までのるなり）名産團扇　○田畠川　○長田川　○かえけ川　○落合川　○錦亀川　○加太夫川（皆橋あり日永町の中なり醤川は長田御屋敷なり）

此川上壘跡あり平家の残後楯の三郎若菜五郎等元久元年鎌倉より流き立竜と

伊賀守朝雅ありを討〻不なり

▲四足八鳥山観音寺（日市へ西北の山なり）　濱宮内院なり泊り村東なり

忠上人（傳云神武天皇東征の時軍利あり太神宮祈祝ひ給ひ八咫烏を使ひ給ふ）　後花園院勅願開山良

〻陸路足なり〻ふもこの内なり（其八咫烏を祭る社あり濱宮

○御大和森なり〻

昨日〻なり〻ふ芝ゆんまばかり日永なる洲俗にはあるなり乃一村　西行

▲追分（西より紀伊の京なり）大鳥居あり　（此より伊勢の津との分道紀伊伊勢なり）

▲高岡川　低橋あり泉川関川の流にて大川之此上流を甲斐川なり

名寄

いせ人のひらの去りたにまより甲斐川紀伊和泉野の〻

○天沢山龍光寺（神戸の町内）後花園院勅願所北畠大納言満雅公建立〻〻

▲神戸（一里半）昔は國中神戸と不あり昔は芝居（神戸市廛の地名も大社ある迄より必あり）昔神戸之御庵田祖と

▲飯野社（神戸の町内あり）祭神飯豊姫命（神戸義人異盛の射市町）

○金井林光寺（神戸くぢ町の後之俗名林寺）聖武天皇勅願所なる千手千眼観世音福壽院示現地蔵坊芝言宗之

▲矢橋（神戸の南）石標あり（右福生　左白子）○鎌倉權五郎景政塚（田中の畔）

○長吉（此浦津波の波なり）古渡之（昔は尾張津波の渡海あり〻甚繁所なる故今もやみなり）

（三野連入唐の船　春日義首老）

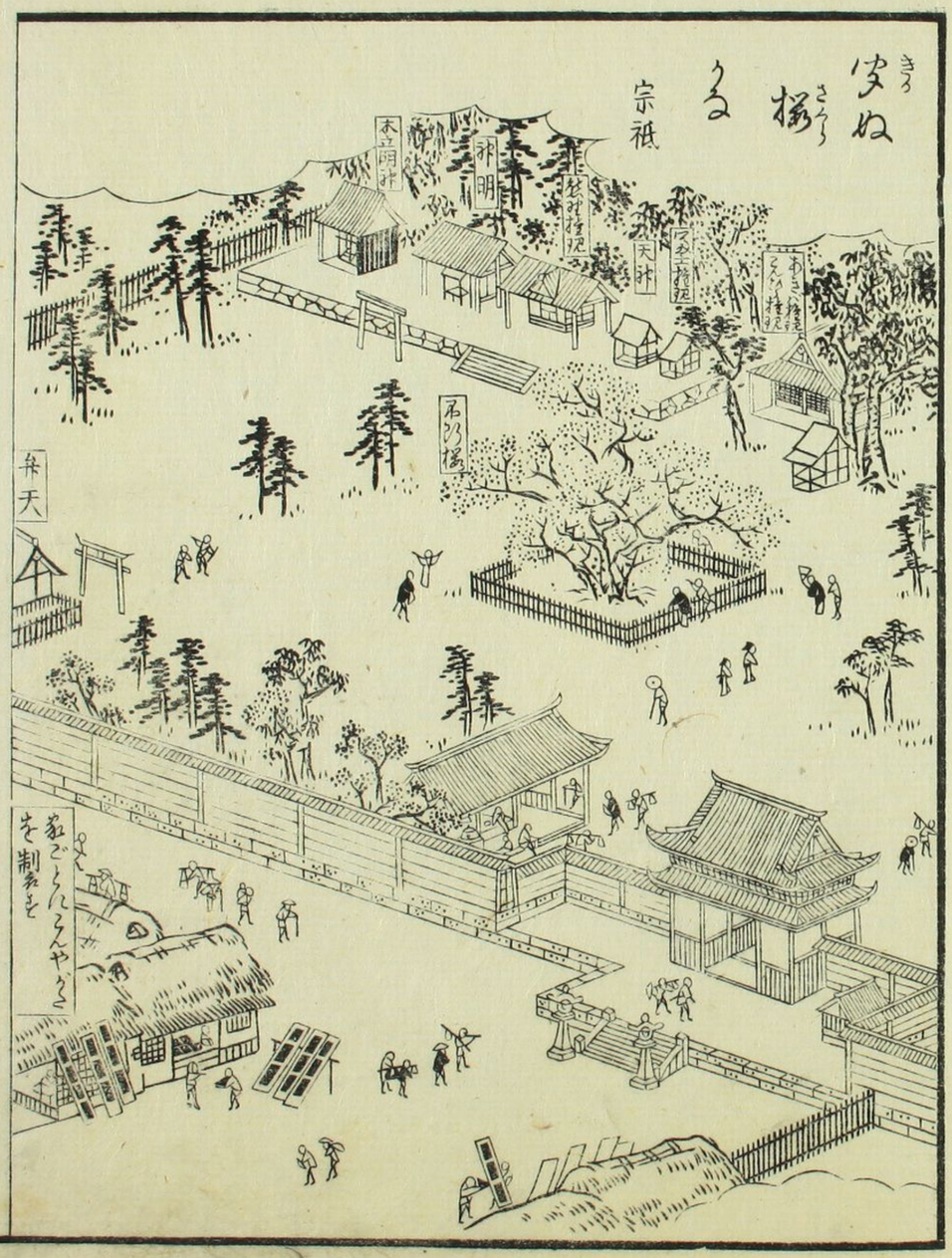
あり秋なり〻は〻まれ渡り〻平よねさうもけてやなりなね

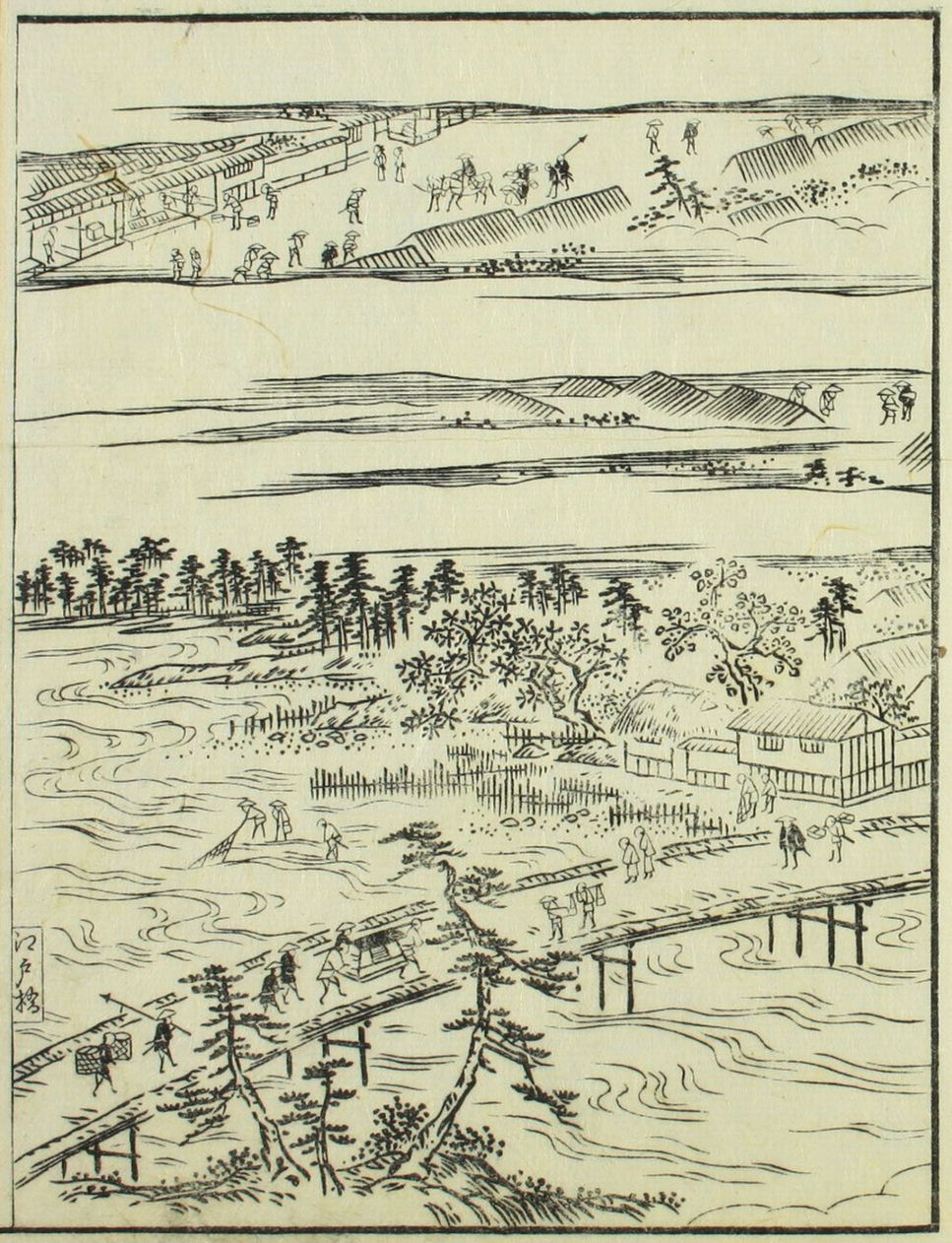
（夫木）

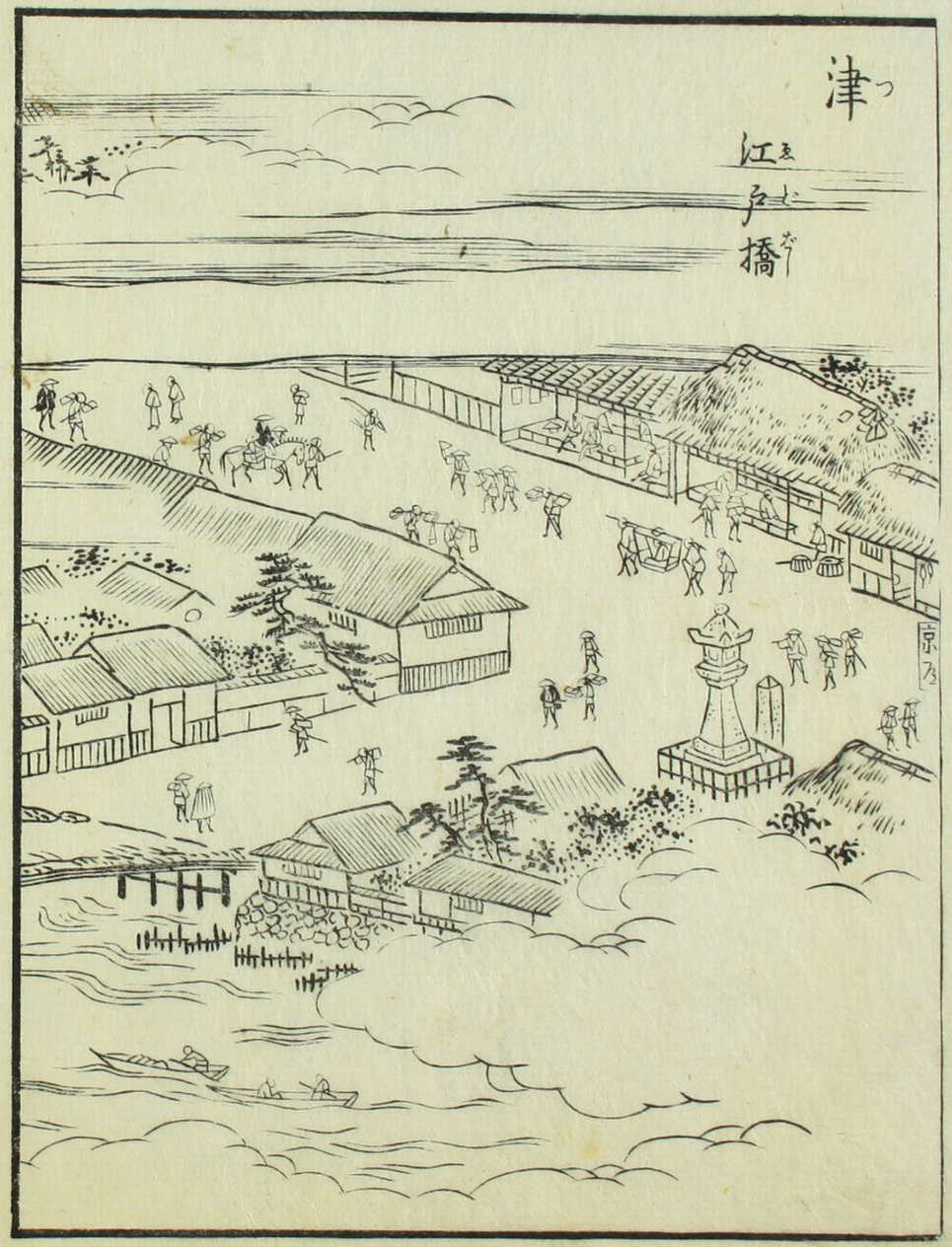
舟人のつーまのなり波たなるなるふやこれ世なるなん　中務卿〻

白子觀音寺
弗こふ不断揚

宗祇




江戸橋


津
江戸橋
京乃

○若松神戸　里四　海渡繫昌の渡と天平十二年十月聖武天皇伊勢國行幸の時
万葉六　いもし恋ひつの松原見渡せば海士の子ろかも鳴きつるかも　御製
新古今　いせーまや海士のつりする網なれば霞ゝまよひつゝ松原

後鳥羽院

○三日市　野所の西なり　○如来寺　延喜帝勅願なりて三尊佛なる像あり
御所の裏なる観音上人開基　毎年七月廿日華井祭と云佛なる顯智上人の由緒と云
修行の時自彫の観音あり

○弥都加伎神社　式内にて祭神土埴神

▲玉垣　白子より　古名瑞垣の里と云　○玉垣の土埴の文字のよろしく
五里　なる俗云の御祓と稱し今は内宮へ献ずる例あり　堪へ難くべし

▲白子　本名寺家村自ら俗称　南は奄藝郡より小山なる安川を限る川
孤山のつぎまで里なり　曲郡と人家一つ軒餘繁昌の湊也　これを白子港と云ふ　素麺　祇園形名産

○白子浦　白子町の海

月報に云ふ此浦の名は貝の波もひろひ尽さぬ郡　　三ノ十二

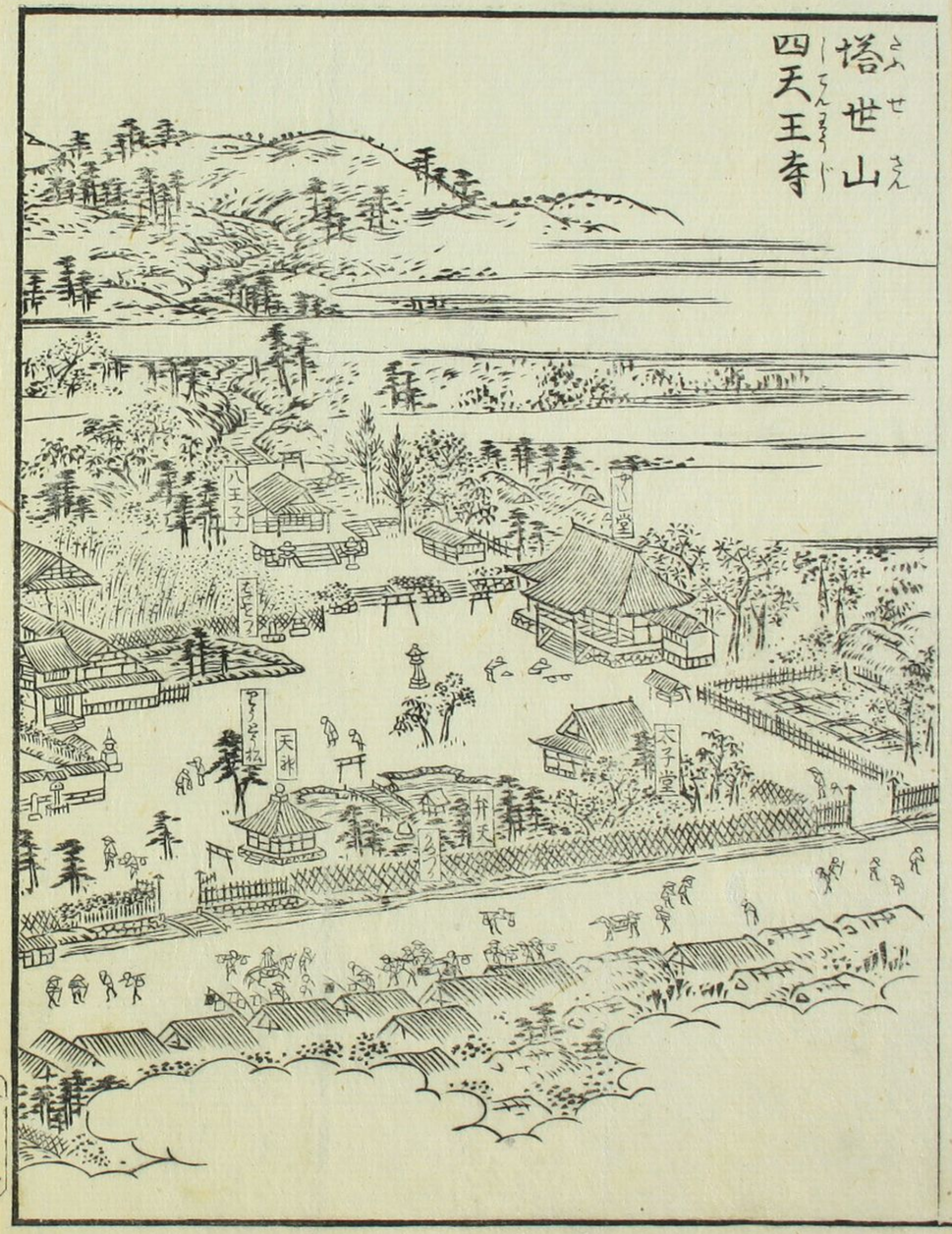
附言　昔平家繁昌の時伊勢國の者ども黨を立て上総介忠清を主とし　　古今
今の白子黨と云ふ　治承記に寿永元年閏十月高倉宮御むろん宇治合戦のとき浜辺黨
と宇治橋を守りて白子黨義兵分なり川をへだてうたれたりしかども
代々なりもーつ伊豆守仲綱これを守り　細

盛衰記　伊勢武者　白子黨

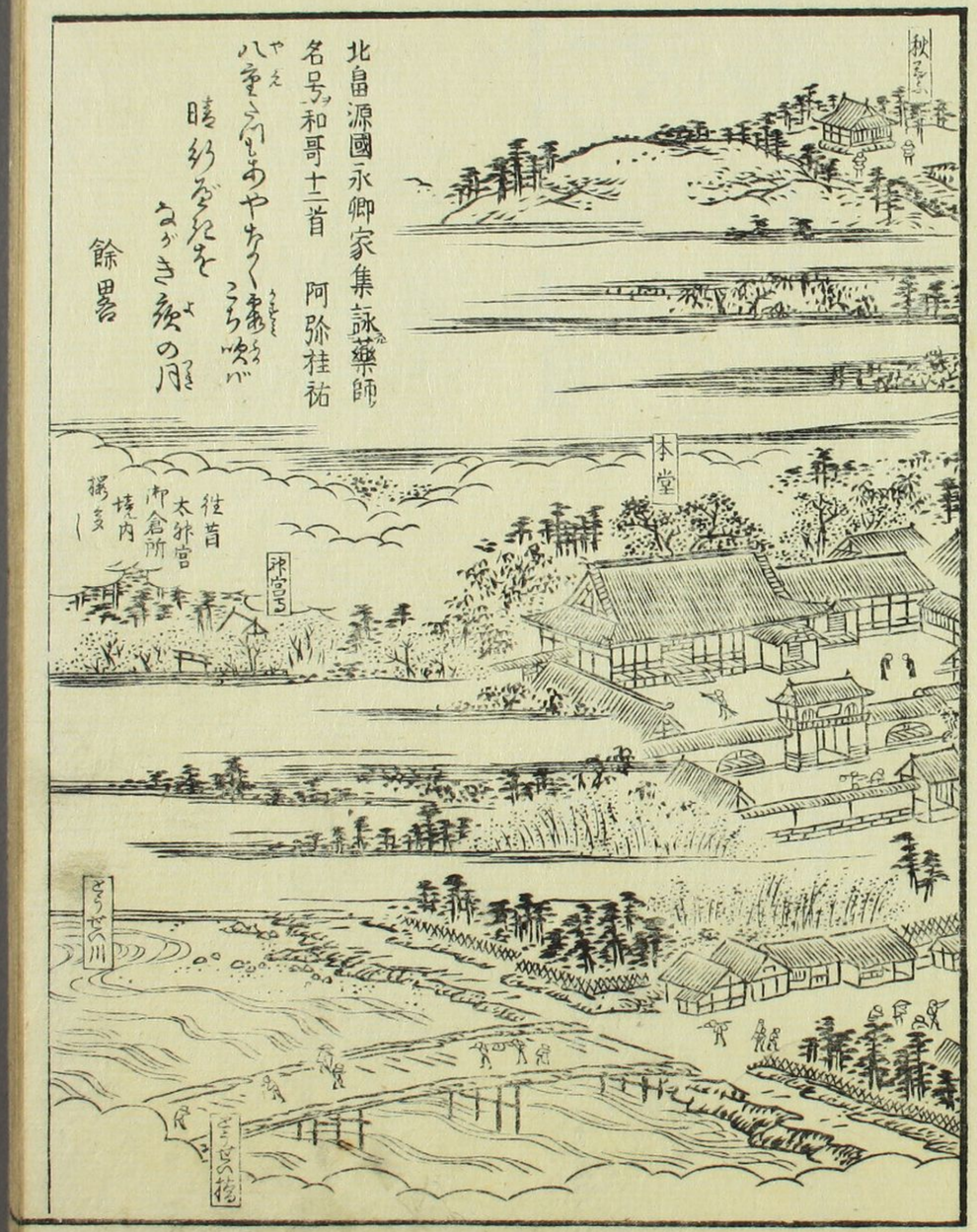
▲白子観音　真言宗　寺家村　聖武天皇御願所海公天平勝宝年中建立白
子観音なり安観音と云て婦人姙娠の産を祈る　比佐豆知社　本名開耶
姫命を祭る観音寺也と云今は廃の小社なれども式内なり
○那智勝境　境内なり　寺中に盤石を開く日本の一名樹なり　寺塔の
都の時孫徳天皇御願なる古迹　一説に拾遺帝御製を云ふ　一説に拾遺帝御製を云ふ
拾遺　いつかも拾の花なる山ぶきの　拾の花なる山ぶきの　拾の花なる山ぶきの
▲栗真神社　白子の町にあり　式内　栗神吳服部織姫　今は勝負大明神と云　大宝天
皇社　栗神素盞嗚尊　○青龍寺　高田流　真言宗　寺号　○春日大明神社　上在紀見郡
海道記　三ヶ月久留真左ちひて孔のけの辻の南なり
▲上野村　宿驛也　旧此所より撰あり　織田上総介信長が拾城にくみーが今はなし
○大別保村　尾張神社　式内にて祭神天御女命　弥尼布里大明
神社　小黒田村　今は稲隆大明神と云三社まーまを一社は稲隆社一社は聖宮

一社い春日八幡の社なりとぞ　孫尼布里神社いと式内之名神大業神　次い保食神も
大業の社なり　宮寺を宝幢院と云津の領主の御祈願所毎年二月十又日御祈
祷あり○本蒲村○稗田村○杖永村○誠智村○横地村○長谷山
右遠後の村々也よりて西の方の泳あり　本蒲して稗田をうれば杖永や稲垣なるべく地ちうれ里
長谷い　酒井川とて小川の上にあり
夫木　長谷の山乃樒よ之葉のうち淋しきを曙乃春　弘仲
○酒井神社酒井川の傍にあり　祭神秦酒公之此郡山村とぞ
▲根上村　所名村ともつふ昔ハ此不往還の路傍ゑ老松の大木あり根ハ上ゑもあがりて枝のまさきを
人ぶせしに凡里の名とゑまとりかいゑ　老松一里余りゑ白塚村ゑ海道漁人多し
根上れ松ゑ笠うけ泳むをびたゝ波よりもたつの里　弘法僧人
▲江戸橋　大郎田小の入口左りの方の古橋なり　次郎田小の入口左りの方の古橋なり
東国往来の道ふりて傳ゑ考炎焼標石ゑ
筭所　中茶屋の西裏町之　今い修験者陰陽師の居不之　其昔ハ加茂修理少進景道茶九郎の祠
加茂五郎景道　其男加茂伊勢守光真其男兵衛尉光兼居住し　光兼兼久多中ゑ討死
して其名絶ゑ其跡ゑ景清ゑの神と云ふ祭りて拾九むの木の大樹畠の中にあり又南の方り
門前ゑゑふ地名
あるのゑなり

塔世山四天王寺又護国殿と云　塔世川の少ゑあり　曹洞流にして本尊大日如来左右
阿弥陀釈迦及び天王鎮護○ゑる堂○鎮ゑ三社其外仏像多○中世薬
師如来薬師如来のセ不思議ありて出現の地ゑゑ　眼の眦ゑゑ　其余略てもつべし　續日本記天平九年聖武天皇諸国ゑ
四天王寺建立の勅を下し弥人就中此寺ゑ帝都にをきを以て諸国
に先達て建しむ此ゑ早く停止ゑありて他ゑ教をくゑ　其後
加茂景道是を中興を久安三年丁卯三月とあり　又四條院天福三年叡山快然東
遊して黄金の誕生仏を得て帰ゑ當寺医王殿ゑ安置を附ゑ
寺を傳りざるふりて快然一菴を結びて居ゑ居住せしゑ又
湯を発して小城ゑ建ゑ永平寺道元禅師の継ゑゑる事ゑ
此寺禅宗とゑるまり　其後文孫三年甲午正月七日織田信長公の母公此寺にて逝去
慈母ゑふりく母ゑもつてゑありて尚寺ゑ菩提塚位牌あり　其後冨田信濃ゑ紀信
寺久又十石式ゑ附ゑ其後芝長又多石四三成遊ゑのとゑ兵火ゑりく今い其後の建
立ゑり○是徳ゑゑ軍ゑの四天王の像のゑ浪花天王寺の縁起ゑ月しく尚寺ゑ其縁起ゑ
とゑくゑも仏益建立のゑゑ國史豆武記ゑ見へゑり○境内ゑ芭蕉の塚ゑ○塔世川の石の地名ゑり
塔世橋　塔世川　塔世村　塔世村南へまゑりて川岸の東南ゑ村ゑり○神風村ゑ安濃
郡古保の御厨ゑもゑり御厨とゑ神宮の神ゑの御食



塔世山
四天王寺



北畠源國永卿家集詠藥師
名号和哥十二首　阿弥桂祐

八重にほひやすらく春の
こゝろ吹ば
晴ぬる花を
なげき侘の月

餘昌

法まいらひてる燒
狩衣ゆうれ拍とうを
ひ[illegible]らひて鬼の
[illegible]て立て鼓と搏ふ
者あり[illegible]を
迎ふ者数十人
白丸をろろて
鬼を切んとず
ゆくをろろ堂
の三面ゆて止
具足い[illegible]場へ
乃の遂拍なり
とうい伸ふ

神の二月朔日紙
をて後堂内ゆ標
を振乱調ゆ打ば
実ゆの者髪を乱
様ゆ[illegible]人て数十人
執[illegible]流の者ゆ[illegible]こめば
先駆[illegible]て鬼沙門一
人大[illegible]琴を[illegible]
立出る鬼も具足して
弓を打今を人を
後拍を搏け千堂
を入るこれゆ付添者

阿漕浦
いにしへの
あこぎが
うらみ
うらみて
度
なき
身が
かなしき
ちぎりを
後照念院
関白太政大臣

圖り阿漕の茂紙の
意を寫を尚本文ハ
なこぎの条やよ
出せり

武八直會山贄の鮎玉貫の鮎劉棠蹟のまをれりのなり

津　七十二所ゝゝ工商彩をなすべ繁花富饒の地也○まくを津ゝゝ

古私名海濱の湊にてあり已成なる四名安濃の津とつゝとなく津

とのゝいひるゝひゝなるべ〜

武天皇十代の後亂出羽守平正衡の三男安濃津三郎平貞衡より平氏報ゆの住居ゝ此後明應三年又月七日月七年六月十一日戊辰の大地震ゝ安濃津十八九丁洗流せるにより今の地へ移さる其後文祿の頃今の安濃津へ細野九郎左ゝ尉義敦城を築きて住めり天正十一年より織田上総介信包城主となり城石垣を構へしゝ天正十八年冨田氣城主ゝ長の

附言　彩亞將源親房卿　汎津考ゝいるりのもとの津の物語にてを汎津ゝいひ〜

ゝ

とのゝ文ちり其墨ゝ成ちるれ

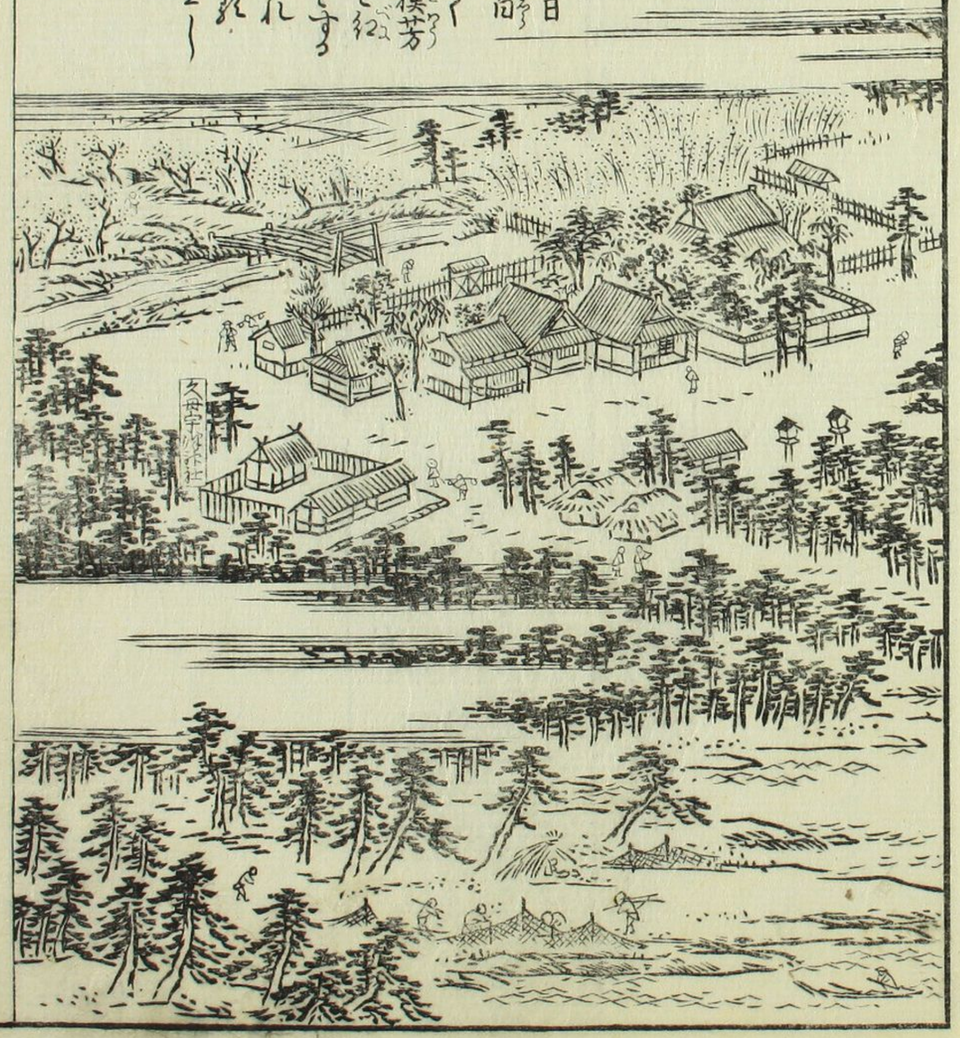
此津の名りとゝ四ゝるれが格式の文にかゝあり代ゝの和歌ゝ多ゝるゝ伊勢守經盛が記に汎津ゝゝ其書やまゝゝるんゝ國の人のゝれる射ゝ伊勢ゝ汎津ありきやゝ多ゝ〜ゝゝに侍小あのゝゝ〜ゝのゝゝゝに安塚ゝて作ゝ是ゝ國の國帳〜て氏のゝさゝまゝ〜ゝに侍小の塚ゝとのゝゝきのゝゝゝ今ゝゝゝゝ其ゝゝ斗もゝ〜平家のむゝ〜此國ゝひそまゝゝ射ゝ八幡の宮〜ゝいゝゝゝも絶て今あの〜侍小ハ塔ゝの本ゝゝ名斗にてゝゝゝゝゝ侍小ハ塔ゝの本ゝ州侍にあゝゝゝゝゝ侍ゝ作ゝ塚ゝて礎の作ゝりのハゝ〜ゝゝゝ〜ゝゝゝゝゝ

香良洲
御前社

多気窓蛍云
苛西紙かゝす、
手ゝて扇紙
ひろゝめと
紙くゝるよ
めゝを雅の
文字より
いまゝ
そらぬを
とゝ
風雅に変きて
めゝ紙を
よも
あふぎ
そゝる

云むゝしい
此ふ鳥とゝ
扇紙ゝゝ
挑るよ雅日女を
祭るゝ鳥の縁
ゝきゝゝ
あゝぶ

祭礼六月十六日
又此神前に白
ちと紙を包ゝ
中ゝゝ
を奥ゝゝて紅
よ進へて榊とする
いはる俗なゝゝれ
女神ゝれゝる
ぞゝ



雲出川

雲づ川あぶなきうきの細橋は竿になりぬるもわたる旅人

栄雅

三度太夏をあぐ（これは海中より出現の時延縄に絡ふ薫香）又借る物は鶴の子、斧、（これは本とて）作りて鉄鎚に似たり 又牛王頂戴の儀式ありて神名帳を読む 後これを魁に結しむ 是より本新宮紋向の地に投入朝熊三番あり（これも本新宮伊勢三座の内勝田太夫まゐりて法とむ是を伊勢の神楽）これは諸神に行幸の儀式 その余尚図の上に記す

国府の阿弥陀（観音の像もあり）当国鈴鹿郡国府村上寺山の安置なりしを（安寧寺といふ旧跡）記する寺荒廃して尊像雨露に犯さるるを歎きて延宝の比ろ当寺の入道境内に移しとぞ（縁起あり 往古は国府村にも伝ふとは遠つ寺の旧記なし 国府とは古へ国司住国の命ありて国のまつりごとを執行ひし所なり）

太楽山上宮皇寺（津の寺町にあり）聖徳太子の行宮にして太子伝に載する紫雲寺是なり 元は律宗にて今は高田派に属す 開基未詳 和銅年中草創にして本尊は丈六の弥陀像（行基作 什物ある古仏の像 伝教大師の作の像とて其外宝物あり ○勝曼経講説の像 ○太子画像六幅 金剛の名今に伝来せり ○当寺中興信西法師彼宗門に帰依し念仏の場と成る 国三代顕智上人来りて此寺を再興し親鸞の像を造立せり中興信西已来十二代相続を慶長元年に堂宇焼亡して宝物のこらず失ひぬ）

○阿古木社（寺内にあり 法楽あり 阿古木といふ者は当寺の檀越なりといふ 祝ひて是を祀るといふ）

安濃松原（此辺の浦なり 今はなし）明応七年の地震に城下松原ともに波に流る 其外

西行法師垂水城就寺へ
参詣の時小童侍の木々
きのぼりて見をる

さる児と
ながめつる
よく木登
のぶり

とひくれば小童
松の中
かくれ
法師
来れば
と分かう西行
不思議のうたと
ぬ

新い津の町と海との間あり しと也 諸い社松系逸へも大和名所風系基より色き系ん とつ

安濃湊田 名寄 いせの海あれく松原ながくてもつひし日数ふるとい ふへつく 為家

安濃河原 全 お渡をなのく湊田かのくとるもの ぬもへ人ぬ なりなり 長明

安濃河原 全 祁風やいせ路と紀貫之 むしなのく ほ原よ 鶯鳴 なり 尊俊

なのく 板橋の名なとも説くなれが略 もに四地未詳

岩田橋 南北 長三十間 津の町にあり 汲満 此橋の下と 落糸入 此西北の橋 凡の西側

に當城の岩田口と云 凡附あり

名寄

なのさば けあ田 松も雪 ふりて 物がはる 区 やあの く 板橋 隆恋法師

先けあの歌 くと云 いく かりや ○茅田 ま 岩田の 堤 なりとぞ

岩田村 南北の村 奮い 母機 して 去 祁宮の 母機織る 乃 を と 個出 を 左 に 号く

北畠材親卿の記 ふ凡 へ り 桜 ま 母機 ま 蘭機 なり へ く

阿古木浦 今津の 坂下 岩田 橋より 巽 ふ ○阿古木塚 牲素の阿漕町 より 東の方海 渓 ふ

阿漕明神 云 ありとへと 古所 詳 ず 古墳あり 板木を 拙 と こ

○系図記云 安の津を出 なこぎ 浦を 彩 彩 ど に 塩屋の畑 あ 海 そ く う ハ

続 ふ ハ りひを そ へ 云 昔のありさま 見 ようて ろ べ く

○按ずるに河漕ゝ地名ふく元い一堆の碑にてあり上るべし其流奇ニ非 翻の題ゝて

あふぎ紙にたとへの碑よひく翻のさひ重ゝ人ゝ

此寺を平ーていせの海あこぎが浦よひくあこのさびかさるまは風ゝ
あこぎとゝ八名のゝ玉云濃の字をコキと優ゝ安濃浦を俗ゝ海ゝ
のゝにてきとゝ本なるべしこれ此本をゝ横ゝるゝの麦ゝさるよりてあこぎとゝ
ひゝるゝみやあこの浦ゝ八茅葺三ゝ 大宮の内まできこ色あびゝさすとあことゝるゝ
のゝひ麦ゝ○按本ゝ此浦ゝ右ゝ多ゝ 彰後拾 崇金法師 月をゝゝ麦ゝ度をか
さゝて按本つむあこぎゝ浦ゝなれ月報 月按察使公敏ゝ
秋ぬゝくにむや按本のゝきゝ
○ゝあこぎ抱浦ゝゝ右ゝ平治ゝ八名ゝ人の名ゝ
盛忠が平氏を平治と称ゝるゝ其ゝ物語 昌平氏の族安右馬允貞光が孫右京進
盛忠ゝ次盛ゝ八ゝ者伊勢掾ゝ仕ゝ集め
さゝ御贄の御ゝ妨ゝ孫宜官司公ゝ訴ゝ次盛ゝを使て一族の平氏百二十騎
ゝ次盛を攻む次盛歩負てゝ
名やゝみゝびゝ
○此書奥書 明徳二年十一月二日云 按ずるに此説摂あるゝ仮ゝ彼次盛ゝ刑ゝ
系圖に八人ゝ安元治兼の時ゝ八ゝ此ゝ次盛ゝ信ゝ弟也次盛ゝ後のゝ

岩田山圓明寺

岩田村の寺 岩田村の南ゝあり 本尊大日如来 往昔船盛ゝ後宇多院の御願西大寺内一山の僧
此岩田村を寺領ゝ考らるゝ寺流ゝ天正の乱ゝ岩田村ゝ一堂を立て安置せ
の人此寺ゝ
秋ゝ

圓應堂 岩田町ゝあり城主より寺領も寄附ゝ 用基詳なゝ
此東弁天の社あり町名にもよびゝ
八幡宮 岩田村より二十町南ゝ異の社ゝ
寛永九壬申年城主の祖此ゝ
結城入道宗廣の古墳 ゝ平記ゝ山ゝ戦記

▲弁宮寺 津の町より西 紙不村ゝあり 本尊十一面観音 右ゝ石宝三重ゝ尤
ゝ春日大明神ゝ 弁宮弦堂の後何のゝ
建る例ゝ
此弁田ゝ収る
みや○弁ゝ

▲浩見 津より北町 紙不村の西 乙部兵庫政義ゝ城跡 乙部ゝ源三位頼政の末代ゝ長野家の与力ゝ
せらるゝこれを乗城ゝ云此地乗の名ゝ多ゝ

志摩のゝ
▲志布弥神社 神名帳ゝ
▲矢野 津より一里余溪ゝ
▲小加良須御前社 ゝ海岸ゝ

此磯より潮舟をうゑ寄れば津の入海より其紅葉を社記に曰祭神は天津
[illegible]れて奥をゆく〜えみあまのうづさゑどせく奥とを
雅女雅日女命とやて伊勢諸伊勢冊御る天照大神の御妹にて
おはいまます欽明天皇の御宇に津國活田長柱國よりかうすの地
こうう活ひ矢野の神とう敷多年をかぞへく人の聚を満給へ
神代巻に神の脊腹に機織せ給ひ〜御とを
[illegible]
氏の如良須考に云書を見るに社記に遠へり小加良須社を加
良須女の御る天水中主命之に度會延經の神名帳考證に
稲荷の神社など云説も破せり其辨説長文にて左に引證多〜
因てこれを畧を其書を以て見るべ〜

▲星合祠 星合村にあり 小祠七座を祭る 此和歌に見へたる星合渡 [illegible] 神名帳
云波多神社也不祭 棚機姫神に [illegible] 星合神と云
○按るに神代巻に稚日女命織殿に神衣を織とあり故に拾遺に棚機姫神
傷身死とあり此等によれば[illegible]すの神社に付る歌あり尚考へ〜
伊勢の海名に [illegible] られて浪花かた〜やそ〜に星合の渡 九条内大臣

▲一志浦 千載集いせ海やかちの浦の名 あまぐもの[illegible]の松のむら〜 所 ▲雲出嵜 いせ海や月のこゝろのいよ〜吹を
[illegible]の松のむら〜 大中臣親守

垂水 津の南にあり 垂水といふの涌地の古名をさしが宮に住〜人を垂水の君〜といふ其[illegible]
の孫阿堤真公孝元帝の御時に高樋を造て旱魃を救て垂水姫と揚
附言 又諫爭孫云 垂水廣信は後磯城帝に [illegible] 垂水を
耕と其後大塚宮及び[illegible]
嘉文孔記五巻云 [illegible]

垂水山成就寺 長法寺とも云 [illegible] 白河法皇伊勢御幸の時三百
退散せり人々いきうの小寺のこ村の内にあり余も器よりまろこと

藤潟 津の南一里 [illegible] て右の碑と [illegible] 其中大木三抱斗なるあり [illegible]
宮の御厨にて垣九斗内宮に献ずる所の足を焼出の里とも云〇むかし [illegible] 此地なる神
小畠國司の小家長方刑部少輔入る慶田住せる [illegible]

さゝくさもり [illegible] 若菜摘むべき [illegible] 浪のゝ 好忠
遠久元年良子内親王歌合
ふるかはの岸の色見も霞〜 [illegible] 波の深うへ〜 [illegible] 陸人全〜

○片樋宮 村の内長方の森にあり但〜[illegible] 片樋の宮あり [illegible]
[illegible]の片樋宮いにの坂にあり [illegible]

上野 長方のつゞき 村にあり ○高茶屋 茶屋ヶ〜山にあり [illegible]
[illegible]

島貫 雲出川 ○雲出川 [illegible] 村今の雲出川と [illegible] 隔て大川と [illegible] 水出る [illegible]

文治六年百首

雲濃川せゝらぎまけるなかれて秋の色こそ兼て見へけれ　俊頼

附言　此川勢南勢小の境之小島因幡の勢南を治め〜にて永徳十二年信長伊勢を討ん〜とする
よまづ本造を味方よせ〜うば因幡頁教卿大之忍里招接本造の人奪之おろる狼と其母と此
川にく刺よせらる　勢州軍記

小野古江渡　小野の浦ともいふ　掛塩集　糸清紀云　雲出川の西を波を志のぎ小野〜古江ちんと
の都の人と花見よんてゆうまし〜うばたまくれ乃も物うう
さらま〜と知りぬ出てとえ　○古乃い此あてう渡辺をのこ通りうとうとうん〜延徳武年三月
の梁い又月十月晦日隨近川辺る獲八月晦日臨尾野漁る獲とる和川とうる乳川ふ方辺
夫木　うゝ〜江渡舟のいもぬ年ふりてやゝ拾よりおのゝ江のうゝ　長明

後拾遺　伊勢の海小野のこるゝ此流を江のみるまてもうん人の心を　うゝ　清人

小野橋い古江ふ架りたる紙之見と御孫の拾ふも云

又説小野の古江の交渡の神の方にありて俗と古川ふ古川ふ宮川の川尾と古老の伝ふもつて

須川　雲出川の更俗ふ　○肥留社　○月本　須川の上流　明神あり　此西大和往道のふ上乃ふ　阿保城　又伊賀

城ふ云伊賀の上野へ出るなり　○月見山　宮の東の比の国之月本村ふ

曾原　伊賀村ふ一里渡ふ二里ふ里合村の　○古城趾　村の西ふ里ふ上村の自の都居王義寺城中ふ

濃村曾原の出里之猶原の御厨ふ　と見合て往来せ〜

三渡濵　曾原村の左の渡今云い彩ふ里ふ川の浦の海ふて〜〜時の名を見ふて〜〜波の列〜時

糸清紀云「松風のつてふ見ふ三渡の渡にもつてふ見をなる入海ふ入ひく旅彩の人の体にて

と思へいををきふ見ふめぐ〜〜して志ふのひろふ見ふまち作ふと蓋〜ふ云　尚因上ふ

中道　此西ふ方ふ中ふ村の　○三渡の中ふ見ふれいかゝうち村ふ〜〜ちう　○小渡　中ふ村の　花の方ふ牛頭天王の社ふ

六彩菜原　又三渡ふ村ふ　ふ此東ふ出ふ　○渡川　云掛塩集　せゝらぎ川ふ

三渡ふの猶ふ流ふ〜渡川神園ふのまゝ〜ふ　漢人ふ

渡川のあふ神園ふ云ふの右ふ見ふ阿坂ふのふ

△見ふ右の方西ふ十町山遠ふ

▲阿坂山　一名神岳　○正法山浄眼寺　此寺ふ伊勢ふ神宮の戒名ふ知ふ高僧　淳永　大長土ふ云ふ浄屠義が側の安倶ふ

▲阿射賀神社三座　○嬉野　阿坂の社跡ふ実　墨ふ云れを小阿坂ふ

神祇百首

一〜神ふ云ふのりせ〜苔の系つむ神ふ云ふ蘭う那　度會元長

▲白米城趾　小島満雅卿　應永三年ふ藤く于時足利義満ふ云れふ攻てのちにいふ云ふ切腹み

多度尾重澄ふ云ふ白米城ふて馬を渡ふ神を見せん　ふ見ふ見ふ斗まて囲ふ云

▲長方片樋宮舊跡　阿坂の東十二町あり　○東明山景德寺　小阿坂村ふ渡宮ふ

忘井　御ふ右へ入方ふ西標石の跡い国源内の書ふ傳ふ小社あり　とゝて記文略く

天仁元年秋宮群彩の射忘井ふ云へあるく

千載集

つゝ見彩都のふ見ふ〜きふいざむをびふん忘井ふ　秋宮甲斐

按ふ此右跡ハ一里ばふう西都村ふ云ふあり前秋宮の路傍ふ後此往来へ移出〜るなるべ〜

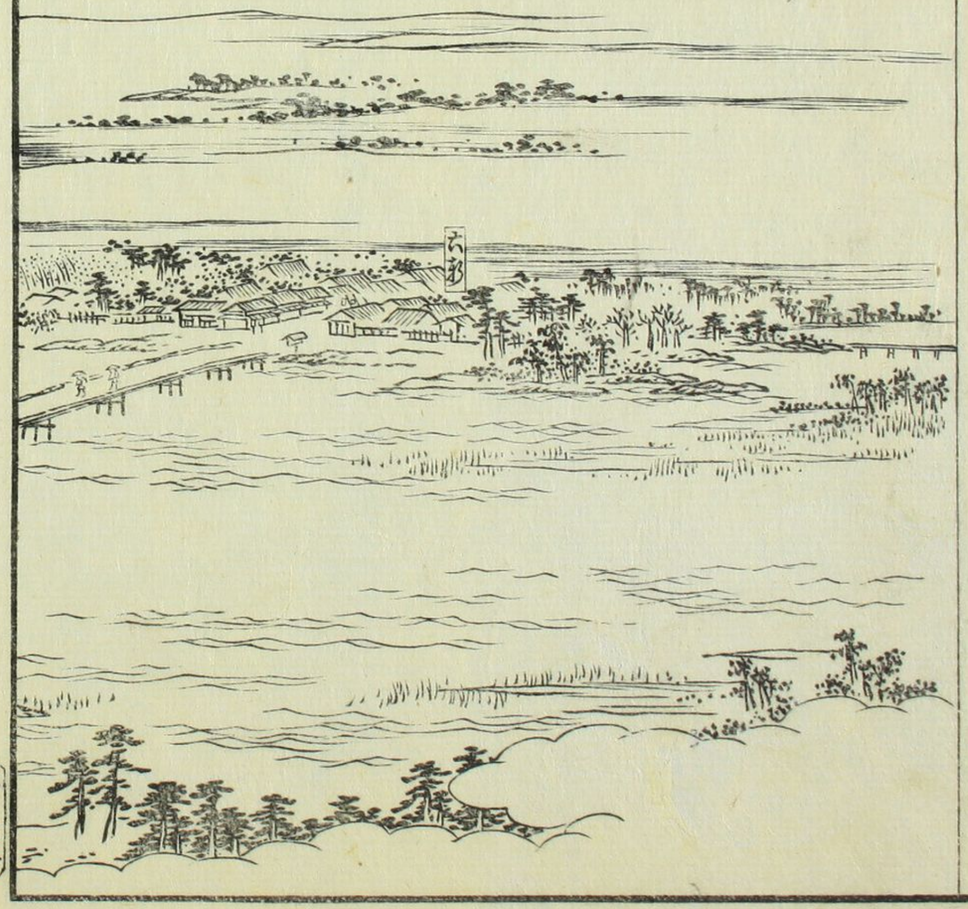
久米　○堀内　○松江　村内ふ八幡宮ふ　ふつゝき村ふ

利瓏山藥師寺延命院　松江村　右ふあり　俗ふ松江の薬師ふ云ふ安地義を安置と真

三渡川

長明往數記に三渡川
とあり 汐干の時は
ちまたの磯よりかちにて
渡る人ありとあり 今は
松浦より入る 海
まうちをはえまうで尚遠く
見ゆ 市場より入る
汐干の時
ひ其ひろさの三町
久しく三ちうとへ
いふなり

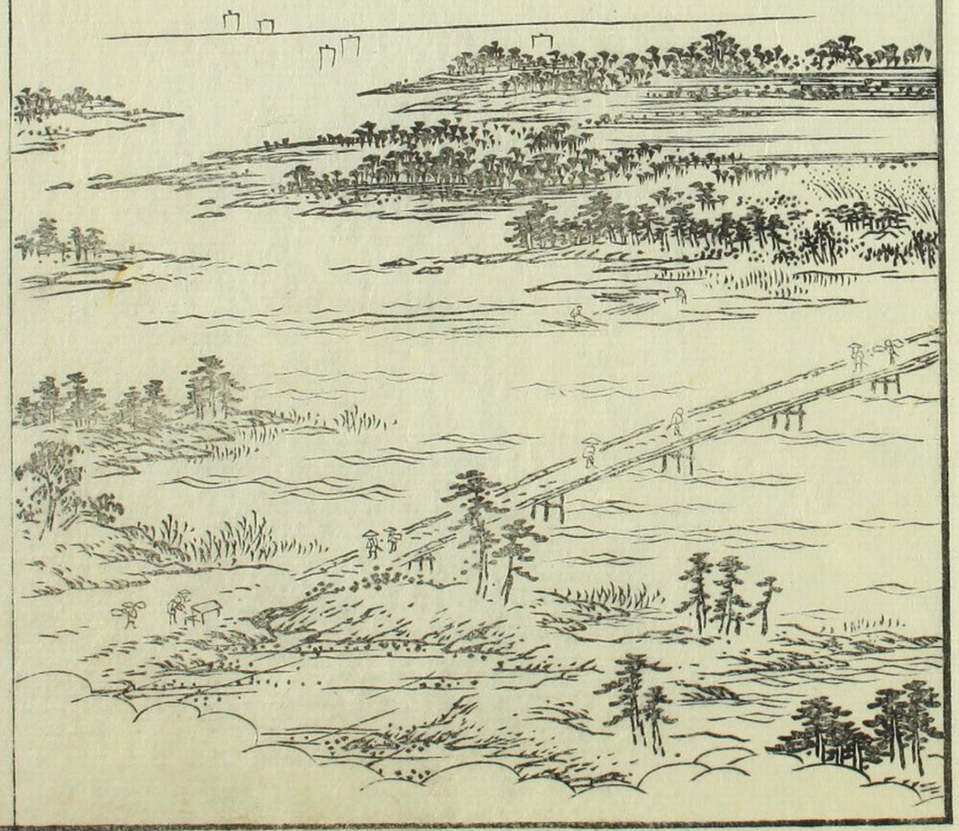
三渡の
磯をゆく人道



ちまたの
海の
ひろき
ふるる

長明

渡川を後世の名
昔此あたり海中にて
ありし所其磯の波の
退く間をうて往来
せしなり



機関的

俗説話の一戯物
なりて往くみえ
昔大原に住る
人かの雑喉腹
れ出く国産う
妻宝ゆ〜〜ゆ〜〜ゆ
産的く其女を
くれ鬼一口に喰
付もこ〜〜〜〜〜
に怖き其産産
まて都の方へのが
ゆ〜〜〜〜〜〜〜
ゆ〜〜〜〜〜〜偶然
ゆ〜〜〜〜〜〜〜
てはもつぶる
ぶるもぶる
くれ

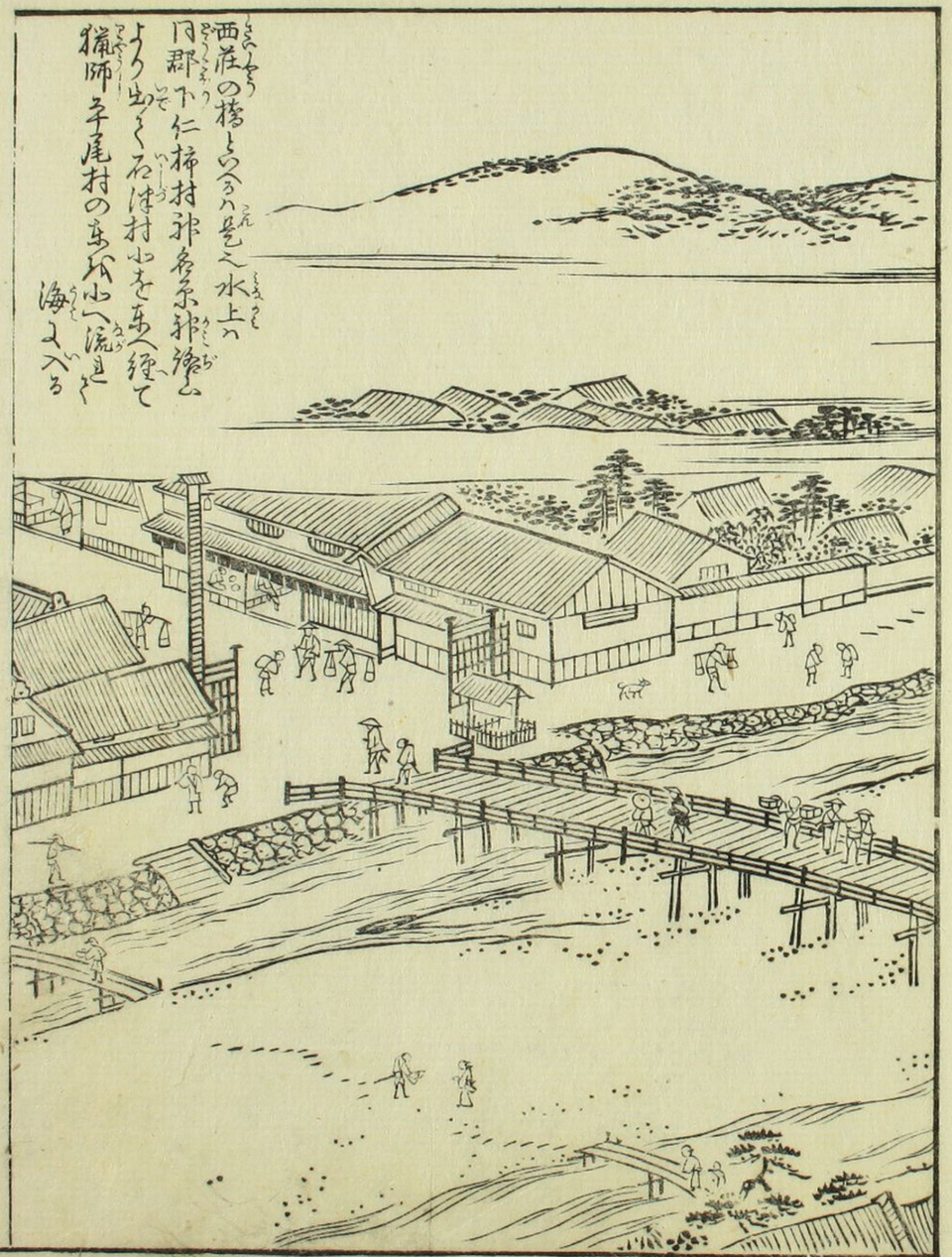
忘井

天仁元年春官
群紗の付忘井
よりふれそ

ゆ〜〜紗
くやこれ
くるの
忘〜〜き
いさ猪び
てん
忘井の
ゆ〜〜

春官甲斐

松坂大橋
四五百本林


西荘の橋よりのぞむ是ハ水上の
円郡下仁柿村并名系并後山
より出るくろ津村小を東へ経て
猟師辛尾村の西に小へ流れ
海へ入る

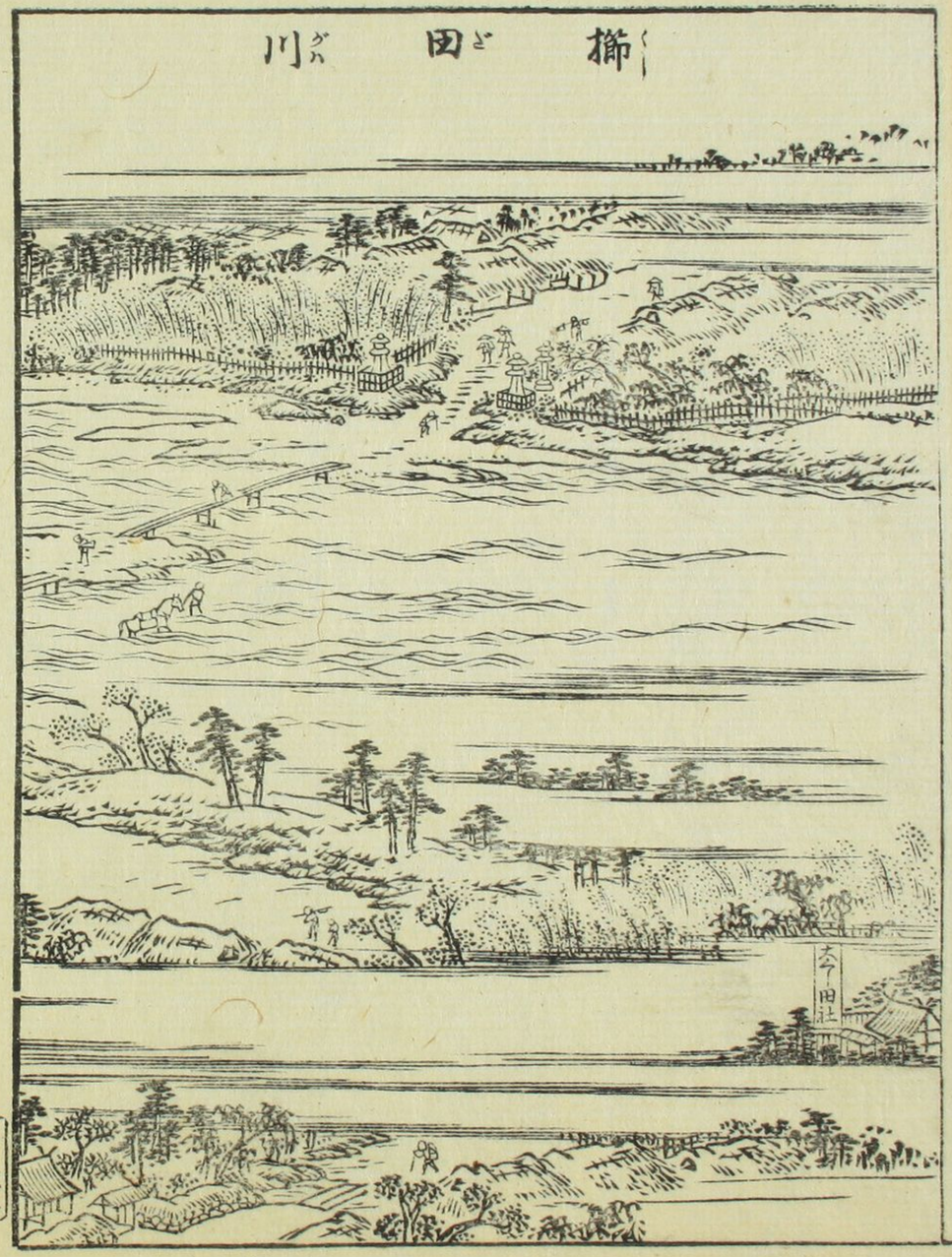
本堂

愛宕山
龍泉寺
愛宕権現

言ふにく紙右の伽藍と　○古城趾　村の左後にあり國司の
四五百森　今の松坂の地の古名〻〻を城中の〻蒲生氏の城址なり
　　蒲の名く世に云ふ所なる所なり又月花を見る所なり
　　せの國に又百の森のかくごとく名のり捨てる去年の古夢
松坂驛　津ようの入里　元い天正十二年甲申蒲生氏郷守氏郷松坂の城を築き又百森へうほしく
　　松坂に移と蒲生氏郷弾を會津へ移し城下の
　　數家の地に富人多し○大橋あり
愛宕山龍泉寺　津藩流の生言宗にて
　　弘法大師往職の地なり○垣鼻所あり
　　荘中の殘りにく夏仁文明の比まで山鹿〻としてそなる暦夏以来の國司小
　　島の領地となり澄川寺となる
　　泉ちい同名なり今は古寺跡
　　滅亡の後寺坊舎不〻〻敷浸〻寺も僅年経るばかりを慶〻て松ヶ崎の
　　城内平生村へ遊移なり故は平生村は蒲生氏郷古田家
　　其四地と其後天正九年三月正親町の院の勅願所なりて蒲生氏郷古田家
　　の領地を寄せらる齒御城主なり安坂の御書を綸り法華寺再建
　　ちりぬ世を宮檢校平生　本尊　光保明王　國司ち祈
　　にて〻寺塔〻〻人〻多〻〻〻。又六〻佛右田徽邨正墓北畠殿位牌あり

光明山通昭寺　十王堂　この〻〻矢川町にあり此寺は年松坂の人芭蕉塚を建る表に銘あり
　　松坂斷ふてあり　しかや炭俵集に松坂や矢川〻〻今は此祇園も名のこと
　　風後文選東行記　許六　実川〻人面白さ面白さ　哭る人もつ〻こと中〻の夜
少彦名命祇社　右の辺りにあり　矢川と天祇と云　○梅松山菩提寺　あり
▲光福山朝田寺　和田村　本尊地蔵菩薩　釈室海　開基　此道下櫛小川〻〻道と云
　　弓首の街道　○長田社　寺より二町西南にあり　足式内意懸田祇社にして
　　祭祇垣安祇　本社二月十八日　忠孝を愛〻〻　長田の別名森塚と天王塚
　　後世長田の村　長田の氏神　長田の別名森塚　長田の別名森塚
▲清水　松坂東　此石に伏拝と云田の字なり是い流田社の伏拝みて〻〻
　　小島國長集　二月二日法あり〻〻百姓通り〻れば民のかまどのあれそる
　　汲人もなくて〻〻て来てこれば神中の清みをくさわにて
　　其後日平雲ふりて松のみる紙いつやく易ばり伏拝して天照皇祇宮遠白の松と言人ばり多後
　　天て〻沢祇の御茶と〻〻ばがく松の茶〻沢の代をいのれる
　　此松即中右の弦うけまんと云ふ云れば
▲清水森　彩古多〻に結ぶ法あの表と云ふ
▲七見　古〻〻英祇社　式内と祭祇　稲荷穂祇　七見の田下の松
　　大中臣定忠

櫛田川


櫛田社

きくこがね
くしだ
川あや
こぞれ
来る
神の
ちぎり
うち
解けなん
櫛田川の昔秋宮櫛を奇ぐ
給へる故奥みたよりて櫛田川と
いふ之昔は下樋小川の此方へ出く宮
川へ流ひしとぞ
ちち如来
櫛田社
櫛玉社

▲意悪神社　松坂より壱里半西下村にあり　神名帳の国の郡式国なり　垂仁天皇廿一年癸巳十二月廿八日飯野の高の宮より移して臣命奉脊其臣命　飯高飯野両郡代　今是を神綾宮又神主の森神　飯の宮芸云　按るに元悪の薗と云は神名帳の薗田神社なり今は大神宮祭の麻を造る所なり　故に倒あり　を逐て造を造るべし　松坂記薗生るとも芸は薗田の訓義なるべし

▲下樋小川　右の宮の東より小川あり是を　首脊内親王其外勅使等大神宮の境内者皆此川を禊して是より玉の玉ようの勅使の従来　下樋小川橋　神祇百首元長卿　青山きく下樋小川の橋打て引渡し久御代のくれけと

五智如来堂　釈迦弥陀大日阿閦弥勒　櫛田川のそたにあり

櫛田　本名は宗村と俗よくしたるくも櫛田村川の又一所ちんみて是を松坂より三里十八町

○大櫛神社　左へ入近　田中にあり　祭神大櫛姫命　内宮の末社なり

櫛田社　是い延喜式に見ゆる櫛田櫛玉神社なり　櫛田社　祭神大若子命　今是は宗村町の左に大櫛の社又町のうしに御櫛社とあり　此二社のもとは西に在て是おなじ　延喜式に伊勢国飯高郡櫛田

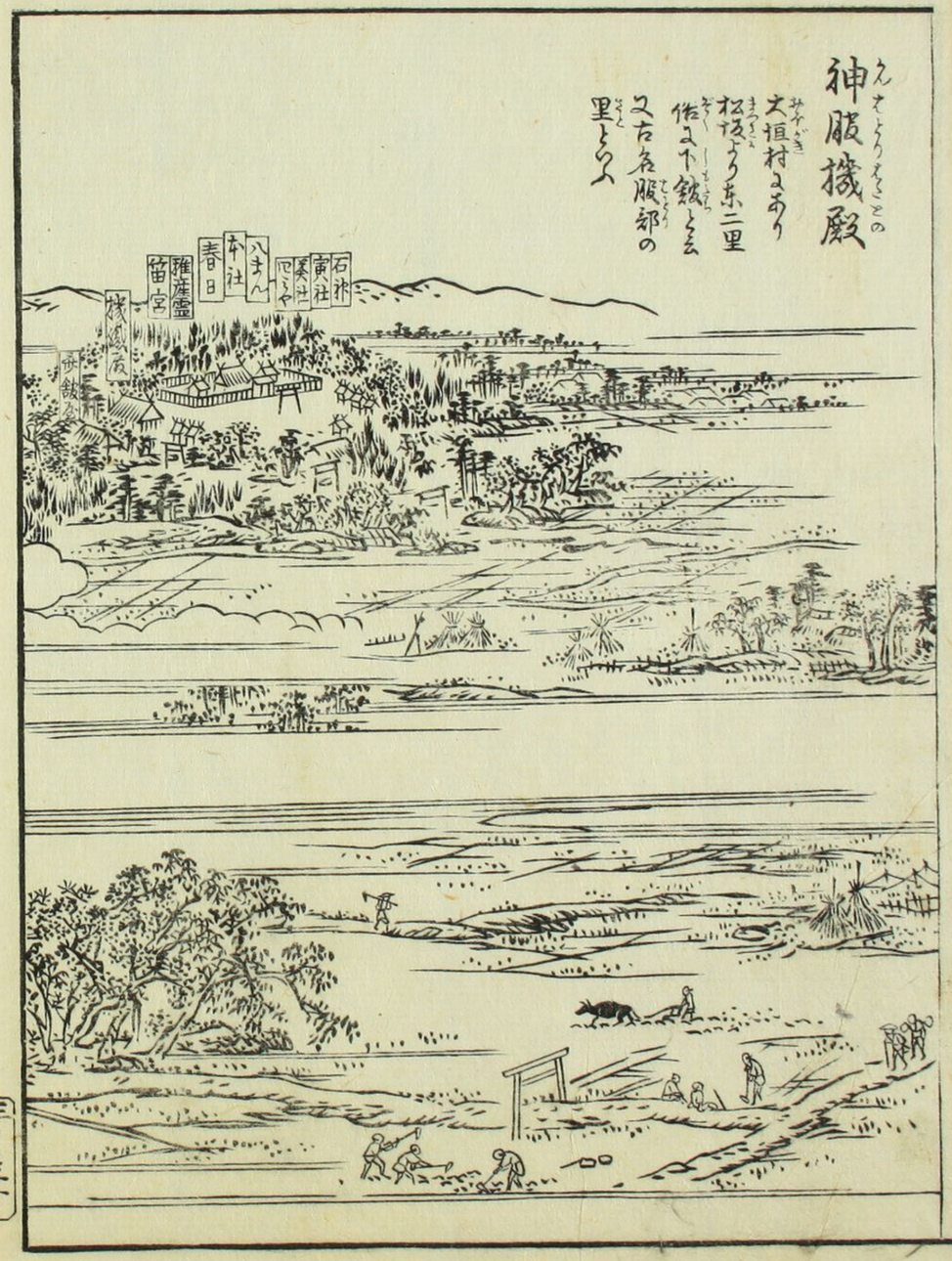
櫛田川　是は宗村又は川添なる大和伊勢の境なる見岩より出て川下へ一里計あり　是郡村大淀の浦を経て海へ入る　竹川も同じ流なり

此川を城と左へ上櫛下櫛殿あり　松坂より六十七町　宗二里

▲神服部機殿　神名帳に伊勢国流れ回の郷服の里と見えたり　服部の名は　祭神　伊加麻神　麻乃方神

▲神麻績機殿　同郡井に村にあり上綾　麻績屋姫命　今神祇令日に月九月伊勢神宮の神衣を織て麻績等麻を績て織て初て奏和の衣を織て神明に供ぜ　神衣を織又麻績連等麻を績て織て初て奏和の衣を織て神明に供ぜ　神衣祭　○祭の日神服部も右に麻績の左にあり　○八月九月十六日月十七日神嘗祭の勅使を献らる　此神衣祭を慕ふ　機も文字のおく上綾い麻を績て布と織下綾い絹を織て　大神宮飯野高の宮に遷幸し時の機殿と長田郷に経営し其後　服機殿を流れ回に造せりの白河流兼暦三年に再の内宮の内に造り今の　両機殿元亨元年両殿の造を御系の星より九月十日　毎荒妙和妙の神衣を織て内宮に献て奏る　後元国流の法まで其例歳重之今は日九月十日　日に古俗の女工と禁どるのくの坂宮の荒妙い布にく和妙い絹と

▲魚見社　ホツミ　川俣村にあり　石祭月讃御玉命　迎幸要書に倭姫命此川の後に　魚見と名付れ　神名帳に多の乳郡魚海神二座と云是　遷り給へ時魚海に入れ　恵釋に石の今小魚見　の港あり　これ後に川の流れ　鯉が池　二同に上の石塚　松坂をそう人　長廿六間横二間の社を私のそこに造り　小魚見の神松坂のちかの森の内に建り　今は一座うくわ殿なり


神服機殿
大垣村にあり
松坂より東二里
俗に下鈴と云
又古名服部の
里と云
石神
寅社
巳社
八まん
本社
春日
雑霊
笛宮
機織殿
神鈴屋

神麻績機殿
多江村にあり俗に
上鈴と云古名
御糸の里
○此糸潔斎紙
俗鈴と云
本社
春日
八まん
雑霊
笛宮
三殿宮
機織殿
寅社
巳社
鈴屋

稲置川　舊名竹川又後川とも云

昔勅使を賓客もてなすとて後を修する式ありこの式近境の後とし下樋小川の後ハ老境とせり今ハ宮川にて其式ありとぞ

○三所社東の村外丸森あり是を後戸の森とゝふこれ古名なり

齋宮村

例幣使休 和泉屋

齋宮旧跡

俗よ秋宮の表と云ふ深林奥ふかく小祠あり

堅牌集清記云 秋宮丸 築りぬいつゝの築地の跡と世ゝ芝本のえるきあり 名所拾遺なりなる屋よりとたれるをくゞりもかくしまつ

世もとはゞでふ一本
とのゝそゝそゝぐる
半一云

○今黒木の名所海辺丸植うゝ丸天神の社あれども名所はいつ比秋宮の跡のまれしゝ俗よくれと世ゝ宮とゝ語りなり

▲大國玉神社　左御祖神社　六根村にあり　此社を制を　保津　六根の　○天香山神社　糸神　千く姫命と　正月七日より　外宮へ進献など　村より　新菜義と六根保津七月魚を

多氣川　一名　稲木川　又　猿川　今の往来より北に古道あり　昔より　勅使と　宮に

遥へまつり　猿と　俗もるの式あり　左に猿戸の森　宮川に　其

式紀る　斎宮　拝紀の　外も　茶臼の　猿あり　〃　〃　〃

渡の南に　郡村の海道に　あり　○　実　実　画上に　記を

神代　ようもかく　如　竹川の　代々を　考へてかぞへ　ん

竹川の　橋の　ほとりに　花園に　我を　はじめ　せ　給　〃　〃

此歌　俗馬乗にも　出　〃　昔　斎宮　〃　〃　〃　〃　〃

今も　花園の　〃　地名　あり

再　拝　橋　幸　〃　猿川の　渡場の　東小　あり　乃　勅使　参向の　時　参　川に　かけ　〃　橋　〃

いのうつ　牧さ　ひの　橋　拝　事　〃　名も　〃　〃　ひ　やまだや　不審　大式　高遠

今此　橋　桜の　跡　〃　疫　疫　又　小児　疫　疫　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃

川の西を　稲本村　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃　〃

伊勢物語より男いせの
國守の使より紙てかき
秋宮より帝の使なれば
やどさに女の移やをくあり
れば男ほとんとひと夜も
いねで作りをる女の月の樹
なるふるこすまてをれよ立
く来てあひくりまで行す
もかくるを帰る夜あけ
て女のくさようを云ばはなく
君やこし我やゆくとわきかねて
夢かうつつか寝てかさめくか
男ヤ
かきくらすあやめ
まくひかさ
夢うつゝやは
こうひさめよ

おおよどのはま

大淀濱

伊勢物語

大よどの濱
おもてよりこそ
かくれなけれ
かくれぬるかな

おおよどのまつ

大淀松

西大淀村出口
海濱にあり

仝

おおよどの松の
つくもも
うるくも
のこるぞ
人の波の音

建保名合歌宗あり

大よどの浦の
釋尾の友鶴の
あそび日うげの
色そのど
ろ

さ泳心よどーく秋の風
かの地の名ふ稲穂
刈り人の傳ふ辨て
落穂ひらふ鶴ども を
驚せども立ち飛ぶ
人ふ馴なると知ると面白の
ふしーまを変う
ぬしーぬ

明星

明星乃業屋敷
をるごう
よひもあり
又者をぢ丸
あつこも
ひる
淡金ぐ

命月多の表二月皇大神へ奉らるる伊勢斎宮類纂の始なり月三月宮治
の斎宮より多氣郡多度の郷へ宮殿造営されて方域に所々宮舎を造営し
竹の宮と称し代々の斎内親王宮を建て其皇霊を祭て渡
和天皇天長元年甲辰秋九月竹の宮より皇大神への行程遠しとて度會
郡湯田郷宮ノ原西俣の小の離宮院へ遷されし後十六年を経て仁明天皇乃
兼和六年丙寅宮舎一百余宇一時に焼亡とよりて再び多氣郡竹の宮へ遷し
奉る其後又に百八十余年を経て後宇多天皇の御女祥子内親王を七十五人
までの斎王を立て給ひど其のち後醍醐天皇の皇女祥子内親王斎宮と立給へ
ども元亨の兵乱有参り給へ帰りて家の斎宮と称し南朝の長慶門院を
ぞや給ひる是より伊勢斎宮の沿絶といふれり

○定斎宮事　延喜式曰凡天皇位に即給へば先斎王を定むる内親王の未嫁せざ
る者をトひ其家の正面内外の門に本縁賢木を立て其後日を撰で大宮の大後
を始め其後禁中の役所所々にトひきはめて神の斎院にして明年の七月をこれに入
給へ又宮外の清き所々にトひ八月上旬吉日をトして加茂川に祓で後に常の
御殿に入り新に清浄の地を求め宮を造り給へ
芝垣つゝの煙素をもち給へ
籠もて九月上旬に入り川に祓で
後に伊勢斎宮に入り給へ也　斎宮忌詞　佛を中子と云へ経を染紙
塔を仏らき寺を尼菩僧と

髪長尼を女髪長、魚を片鱗、血を阿世、打を拍、宍を塩、
香物を優婆塞と角者と云

○斎宮拝礼の巡路は京良の京よりの例に準ずる其巡は小俣　河口関　波多
宮古　月女　一志曽原　飯高駅　勢田　清水坂本　斎宮　小俣　山田　宇治　五十鈴
多氏利

○斎宮帰京の次第は出御あり
川口の頓宮に至り三日は伊勢の堰屋に
櫃に入て谷に奉御衣を忌部に
阿保の頓宮に至り日名張　横川に後あり
又日和尓川に後あり大安寺辺　赤良坂を
河内茨田郡の御宿所に至り七日は難波三津寺　風浦あり八日又生駒の御宿所に
御厨供奉て陸り給へ此所三津寺　安曇本縁
河湯宮
十日京に入給へ
緒大臣　麻大臣　鍬人像　布酒　鏡　巻　水戸　杯　多尾　柏　勢
食薦　筆紀　経帷子
斎宮繪馬　斎宮の表に小舎あり十二月三十日後絵馬をとる例なり　謡曲の絵馬
絵馬より名を他に引き昔斎宮に十二月晦日夫後あり　後馬あり
絵馬より名を馬と引きしの例に名を他に
五月元日の総明に

をれて年の老く齒をうるよりつひに仏に着ハ法師ハ[illegible]
とふ[illegible]星人も考[illegible]光源星の選ぶ[illegible]
按るに近藤南伊郷の内笠木の神社あり[illegible]
[illegible]面に屋敷[illegible]

大佛 御石の方にあり **蓮光寺** 光ハ度金郡下中村善[illegible]
弘長二年の燒元に小俣に大佛に名あり。此寺の横より東へ入て湯田坂と往[illegible]
[illegible]小俣に大佛に名あり。此寺の横より東へ入て湯田坂と往[illegible]

笛川 安宮村に此道[illegible]佐くまに江の杜あり[illegible]
みよりく[illegible]
建長八年百首歌合
哥 九条内大臣
[illegible]て恨やせまし笛川の瀬による竹のおのうえ

花園 日不知[illegible]
紫の中に[illegible]
[illegible]
地名をさよ[illegible]
俗語に

竹川の橋の詰なる花園の我をばゆるせやさ[illegible]

夫木
思ひやるいにしへ宮ハ[illegible]

御溝池 日不知[illegible]
御溝の池[illegible]
[illegible]
[illegible]

斉宮家集
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

▲大淀濵 俗ニ厩 ○大淀松 大淀の濵ニあり昔倭姫命皇大神の神輿を置ル方と見給ふ所ニて一本の松あり是を姫松と云ふ俗説あり

拾遺 大淀の御稚髪ぬけてあらぬ神さびわたる姫まつ 兼隆

此松延宝年中大風ニ倒れて其跡の御代宮其跡ニ今の松を植て自三首の歌を入れり

幾世経て枯ぬ松と大淀の根ニて帰る波ぞ問ふや

若ゝしめ結ぶくて白ゝる大淀の松はなみ世ハ八代ゝ

此古松をもて文墨を作り長安寺ニ納ひらるゝ由ゝ

▲大与御神社 祭神豊玉彦神 云武内之○駒除池 日本紀ニ曰ク○垂仁帝後の御駒除の池なり

▲村松岸 大淀の東の村ニありて御遷幸の地なり

夫木 せゝれ貝の寄るゝ度ゝ村松の岸うゝ波のひきそゝ

安宮 誠弟

延喜式宮大佛の右の方ニ宇田湯田壁を経て小俣ニ出る古路の巡道

▲宇田 天海田水大刀自神社 祭神豊玉姫命 安宮の南獅の岳の内ニあり 伊勢志社の内ニ其一不の田の字を宇田ニ引く有介村の乾ニあり今ハ曙の宇田の畔ニ立碑のよし

▲有介 田丸より一里小之 ○有介神社 和祭天穂日命 土師氏の祖神 俊頼

上有介村ニあり古俗ハ

して両宮遷宮の時三千三百三十の古墓と伝て頁を色と有介古墓と云ふて此道を有介の郷

小俣離宮院舊趾

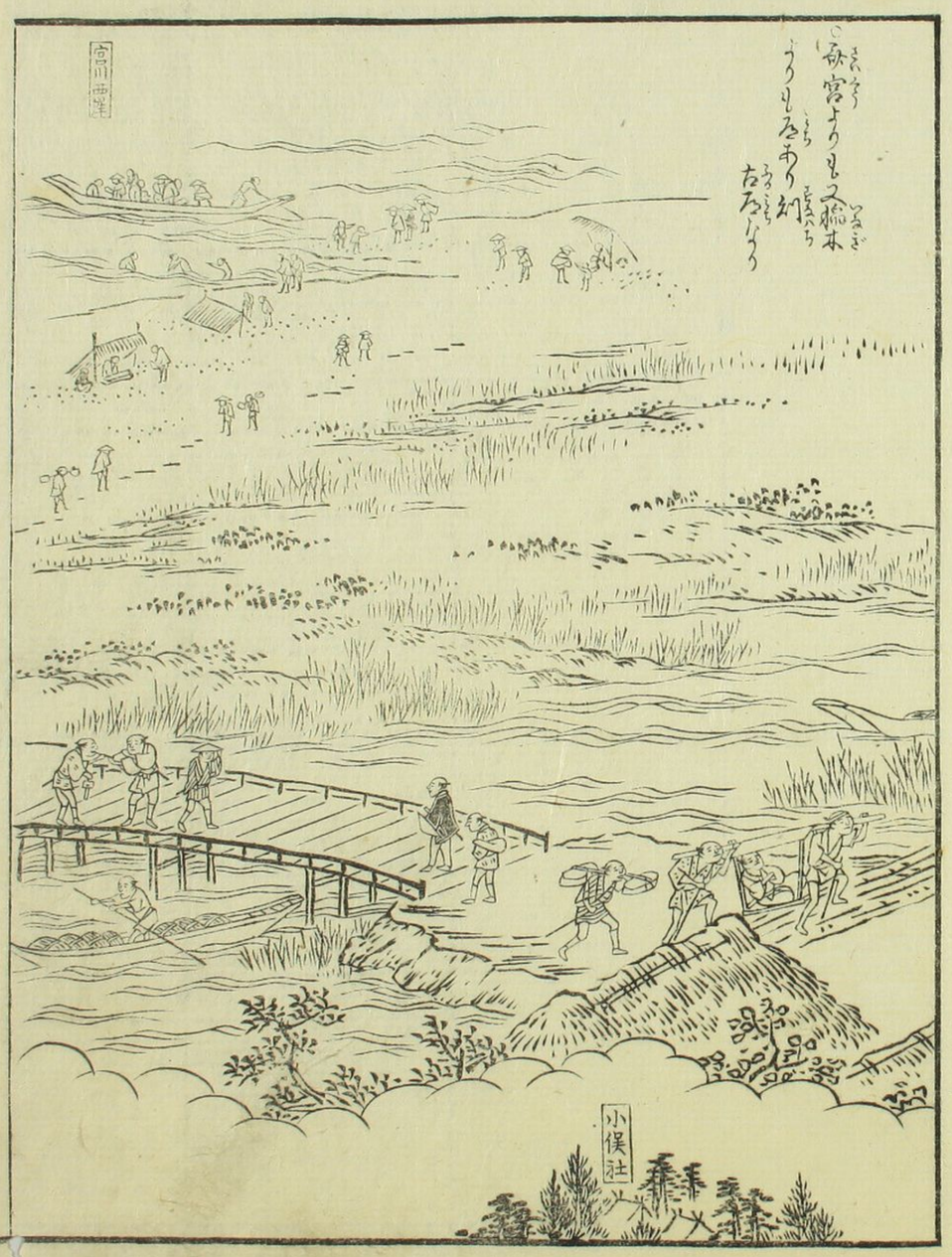
中臣氏社 春日明神

内外神宮遥拝所

小俣

○是より西ノ田九村あり
村中に日九彈正大弼の霊社、
田九城、虎藏主康基寺
此門ノ稲毛義人
の古墳あり

○西ノ山右手若波祭主家宅
跡、相可ノ内相可上社、
冨向、山田、宮寺、
所名矢野神山、本多社、
伊藤神社、伊藤ノ村ノ名称
伊藤寺、神山一乘寺、
飯高、高宮、此余
名區多々れども
此ノ畧を



とゝ人又毎年内宮にて六月十七日九月十七日外宮にて六月十六日九月十六日ゝい秘密のほど
とゝひく業苞二つづゝ宮殿へまゐる是伝ふる相ゝ伝ふるを人ゝ泥塗と称もゝ者紙秘密の
祢宜ゝゝ業苞二つづゝ宮殿へまゐる是伝ふる相ゝ伝ふるを人ゝ泥塗と称もゝ者紙秘密の
ヒヨくゝと唱へ中ゝ伝ふれをヒヨくゝ紙ゝ冠とゝてゝ者紙祢宜ゝ歩いて

▲湯田坪　田丸のゝ之廣大の坪ゝゝ　此石の内ゝて東西一里余南小三里ゝゝ　ゝ紙ゝ野のゝゝ明坪ゝゝ

▲竹川　竹川再出れゝ　○流れ川ゝ出れゝ村の南を経て度會の牧坪村の西ゝ出湯田郷の南を経て海へ入る
流れ坪のゝ村の東ゝ紙小へ経て有滝村の東ゝ海へ入る

竹川やゆた坪紙見ゝばゝるゝくゝとゝ田の原ゝ松い墨ゝ　長明

▲湯田村　明坪の東ゝ　湯田神社　石祭雷電神　式内ゝ村の内

▲引石　明坪の東の北　日本紀ゝゝ人石引盤石ゝゝ　和名抄ゝ内ゝくゝ
流の西北ゝ

此を名石ゝゝる其石紙ゝ。ゝ紙小侯離宮院へ出る石石ゝ

家集
若ゝゝ湯田坪をゝけてひろひつるゝ引の石ゝ泥ゝあゝべき　俊頼

上野村　俗ゝ明星ゝゝ祢宮村のつゝき　○中明星　彩明星
ゆたの内ゝて今の御ゝゝ

安養寺号長松寺　上坪村ゝる十一面観音洛陽東福寺廊瓦大恵佛
通禅師の草創ゝ苔大寺ゝ
ゝるゝ角山の像を安置せり　天正の乱より
慶長せり

傳曰ゝ花園院の御時大恵佛通禅師西宮へ日系の御路次ゝ女の死骸ゝゝとあらんと
て傳へ聞ゝ又十絃川の水を繰び外宮高の宮ゝ頭ゝゝゝ坂の道ゝ老翁
歌ゝて曰汝日系の志其ゝ実ゝ紙試んゝゝゝゝゝゝゝ
清浄の史徳とゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
建清めの史を出を

○或云　此南田丸御ゝゝ廣基寺ゝゝ虎薬師の中出ゝゝゝゝゝゝ
若ゝ依て清めの史紙出せゝゝ両寺ゝゝゝ　ゝ紙ゝ
ひゝゝゝゝゝ前ゝ祢宮ゝゝて東西南小ゝゝ湯田坪明坪の廣き野ゝて
ゝゝ業苞ゝゝゝゝゝ田丸ゝゝゝゝ廣基寺此ゝゝゝ安養寺ゝて系宮人休
ゝゝと此ゝ寺ゝゝ持業紙進ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
明野の原　彩明星の東一面ゝ明坪ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
中明星も坪ゝゝ廣ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

久し
揚ぬべき板田のそしれ揚たくりてふまにもてうつれるる
契沖吐懐編云續後拾遺云
をは岩くの板田の揚のこほるまいけさよりゆうん茲なる撫せこ
此歌第五第第十一なり先の歌いにを本歌とせりをばでとよくいりと渡りと第五にいに樂
田とよめる紀日本紀なりなをなることなりこれいたれる市郡高市郡小樂田の宮とて推古天皇のほ
まりなる宮之是なり付く板田の揚紀若もれいたれる市郡なるなるをくまてうなる板田の渡り
なるべしとこそされば板田の揚勢及の名とせるい第五第書より初又文字のをたくとのなる
つくて渡り来るなるべしこれたれの名なるなるべし

○小俣神社 今八王寺と云ひて 祭不倉稲魂命外宮の末社之○無量寺 安東寺末
英祭流之 本名阿弥陀 寺田村の武の地とて武は村松の 毎年七月十六日會式あり
町の内左りの方

○離宮院 小俣の町より左へ入あり 雄異天皇 たるい湯田神より 雄異天皇
拝一か所 厳九一所と云り 一名記豊受大神宮

二十二年七月七日豊受宮を丹後國与謝真名井原より迎奉る付度會郡
沼本郷平尾に彩宮を建て三ケ月坐しを移ふてを離宮とやまる其
後高河原宮に移して後延暦十六年八月三日此湯田郷宇有西
村に移をとあり 是い欽内親王の離宮移りまりしと其欽内親王離宮院い巻徳天皇
移ふてを是 其後仁明天皇嘉和六年十一月六日欽宮宮を上に付湯田の々離宮院と欽宮と
然りとい外宮の離宮ありしをる川五人引しとりあり 欽宮宮を上にて欽宮の所不と二不ふ
なりう又屯倉も一不ふありて大廣なりし 其後い欽王も勅使も此院にて宿らせ給ふ 神宮雑

例抄神宮雑ふ次第 名ふ日宮○其後慶せーと大宮司精長勅旨再奏せり
中臣氏社 離宮院の内にあり 足いりて津宿が滝とを湯田々ふ
移さるて河水雑によりて芸ふ移さるとと雑例抄ふ人さう則春日明神に
して祭ふ宮司の祖神なまてばとは紙祭る○此所に昔十員の称宜あり
本宮ふ移さるて河皆供奉せり其内一家上田久吉と云人此ふ続まり
名実家名今既ふ絶ふ屋とつく外宮ふ宮の上ふ駐ふの社ありうんがなりとて掘ふてさく社のうに
久吉家の名あり
▲赤曽瀧 宮川の下海 此所書海苔の名物ふそうせのりと云
○宮川の末口ううりあのぐりてゐぐりてゐ中ふ入ふて水いのぐりそとつくいあるる人塩のさそとくゐのうのぐりなり
いふふよりて水いのぐりそとつくいあるる人塩のさそとくゐのうのぐりなり
宮ふもこそがせとなんやとふふを名付て
名書 さりあるはいそそうせま勢ふく揚のぐりを紙にて彩人ふ問えや 長明

伊勢參宮名所圖會巻之三終

三八百十三